

大 学 の 伝 統



一橋大学のゼミナール



ある意味でさらに大きな特徴といえるのは、
人間的なつながりです。

「ゼミ的なもの」の精神

「きみはこのゼミ？」「〇〇先生のゼミです」。一橋大学の卒業生や在校生の間で、初対面のときこうした会話がよく交わされます。同じゼミナールの出身者だった場合にはとりわけ、年次を超えた親しみや信頼感が自然に醸しだされていきます。多くの伝承的な大学用語が薄れていくなかで、一橋大学では「ゼミナール受講生」をあらわす「ゼミテン（ゼミナリステンの略称）」という言葉はいまも生きた言葉として、独特のニュアンスを交えながら日常的に使われています。ゼミナールは現在、多くの大学で教育制度の一環として採り入れられていますが、一橋大学のゼミナールは他大学にはまれな独自性をもつもの。教育制度の範疇を超え、独自の文化として、あるいは大学のアイデンティティを象徴するものとして根づいているといえるでしょう。

変化する時代や環境のなかで、ゼミナールもまた揺らぎのときを迎えているという見方もあります。法人化後の国立大学が改善を旨とするところの教員の過重な業務負担、学生がゼミナールを実利面から選ぶ傾向の増大、講義とゼミとの兼ね合い等々、問題点を指摘する声もあります。また、一方でこうした時代だからこそ、



「一橋らしさ」の象徴であるゼミナールの伝統をしっかり守るべきだという声もあります。多様な意見が生まれるということは、一橋大学にとってゼミナールの存在がそれだけ大きいことを意味しているといえるでしょう。

是非を問う議論はそれにふさわしい場に譲ることにして、ここでは一橋大学にとってゼミナールはどういう存在であったのか、一橋大学の教育と学生にどのような影響を与えてきたのか、なぜ多くのゼミナールが今日にまで語り継がれるに至ったのか、『一橋大学百年史』等をひもときながら「ゼミという伝説」に迫ってみることにします。

大学におけるゼミナールは、18世紀のドイツで誕生したといわれています。指導教授の指導のもと、少人数で学問的研究に打ち込むというスタイルもここで生まれ、特に理学系の大学では理論や実証実験をとことん追求するといった傾向が顕著。相対論や量子論を生み出したドイツの強さは、ドイツの大学制度、なかでも要となるゼミナール制度であると指摘されています。ドイツ生まれのゼミナールが、いつ頃、どういう経緯で日本にもたらされたかは定かではありません。また、ゼミナール（Seminar）の語源であるラテン語の（Semis = half of anything）に込められている「育種」の精神が、どこまで伝播されたのかも定かではありません。しかし、日本の大学のなかではおそらく一橋大学が一番最初に「ゼミナールのなもの」を導入したこと、その源流はドイツ流の学問の探求にあったこと、そして制度として明文化される以前に意欲的な先生方の自主的な努力によって多くの「ゼミナールのもの」が営まれ、やがて大学全体に根づいていったことは確かだといえます。「計量経済学の始祖」といわれ、経済学史や恐慌論でも名著を残された杉本榮一教授（1901～1952年）は、次のように書かれています。

「記録に残っている最初のゼミナールは、明治30年制定された（東京高等商業学校）専攻部規定によるものである。『日本商業教育略史』に、『学生として其専攻する所の学科につき一定の教師に就き研究上の指導を受けしめ卒業論文を草せしむ』とあるのがそれである。（中略）この制度の原型は、ドイツのゼミナール制度であった。それは、時代からいえばアメリカに最初に移植されたジョンス・ホプキンス大学のゼミナールよりもやや古く、日本ではもとよりどの大学にもゼミナールはなかった。一橋的ゼミナールの伝統が永くその成熟した形において、国内各大学のゼミナール制度の模範となっていることも、故なしとしない」

東京高等商業学校は、一橋大学の前身である東京商科大学の大

学昇格前の名称であり、数ある高等商業学校のなかでも特別に予科1年、本科3年、その上に専攻部が2年ある6年制で、専攻部をでると商学士になるという制度の学校でした。当時の専攻部は、銀行科や貿易科、領事科などにわかれており、それぞれの科で実質的なゼミナールが行われていたようです。それも、「A先生のところへ行って東西交渉史を勉強しよう」「B教授のもとで金融政策を学ぼう」と、学生は二つ三つのクラスを自由に行き来し、先生方も大いにそれを奨励していました。学部の垣根の低いリベラリズムの風土、学問の探求を通して視野や問題意識を多く広げようという自由闊達な風土は、すでにこの時代から培われていたといえます。

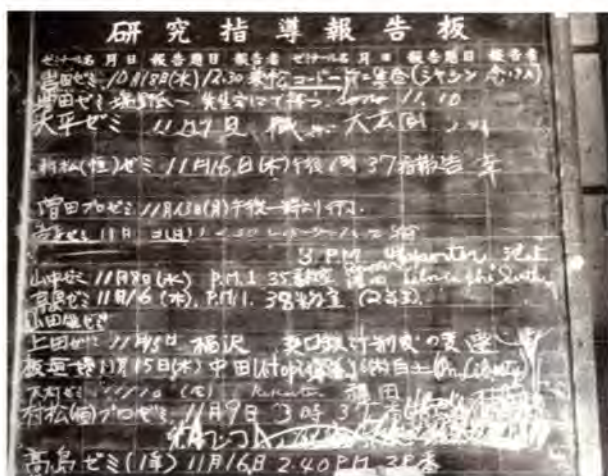
「しかし、草創当時のゼミナールは、形式上これをゼミナー



当時ゼミナールの場所は教授の自宅だった（杉本ゼミ）

ルと名づけるにしてももとより、現在のような成熟した姿からは遠いものであったことは確かである。現在のゼミナールの原型は、実質的にはむしろ千駄ヶ谷読書会あたりにあるのかもしれない」（杉本教授）

「千駄ヶ谷読書会」とは、日本経済学の草分けであり、資本主義国家での福祉論でも先駆的役割を担った福田徳三教授（1874～1930年）が開いていたものです。福田教授は、専攻部の第一回の卒業生で同年母校の講師になられ、明治31年から34年までドイツに留学。帰国後、再び講師を務めました。明治37年8月にときの校長と喧嘩をして休職となりました。その後、明治38年10月から大正7年3月まで慶應義塾で教鞭をとり、大正8年5月に正式に母校の教授として復帰しました。この長い空白期間に、一橋大学や慶應義塾大学の学生や卒業生が自由な向学心から先生の回りに集まってつくりあげた「プライベート・ゼミナール」が



上：学生は研究指導（ゼミナール）板を見て、ゼミの予定を確認した（昭和25年当時）
下：ゼミの成果、論文。一橋大学附属図書館には、全ての卒業生の論文が所蔵されている。

「千駄ヶ谷読書会」でした。テキストは、アダム・スミスの『国富論』。千駄ヶ谷の先生の自宅で、毎土曜日の午後、輪読方式で行われました。

集まった顔ぶれは、東京高等商業学校から大西猪之助、車谷馬太郎、田崎仁義、内藤章、内田敬三、中谷香邦、小林益太郎、米沢靖、松浦要、慶應から三辺金蔵、高橋誠一郎、小泉信三などの面々。原書が高価だった時代とはいえ、純粋に学問を求める若者たちとプライベートな時間と場まで提供し、その情熱に真摯に応える教員との深く、強い絆が浮き彫りにされます。一橋大学のゼミナールの実質的ルーツは、「千駄ヶ谷読書会」にあるとも目されるのは、そこに強い精神的な絆が認められるからです。

さらに、この時代、三浦新七教授や左右田喜一郎教授など諸先生方の「読書会」も活発に行われたといえます。

ゼミナールが公的な制度として誕生したのは、大正9年でした。この年の3月、勅令によって「東京商科大学官制」が施行されましたが、その規定のなか、各教授の担当専門科目名の下に「研究

指導」という文字が明確に記されています。「研究指導」はゼミナールの意味であり、戦後「演習」という言葉に変わったのです。

この大正から第二次世界大戦が始まるまでの時期は、ゼミナールの第一期黄金時代でした。それぞれの専門分野を代表する一流の先生方が学生と親しく膝を交えて指導、学生たちもよくそれに応えていました。大学に進学する人の数自体が少なく、学生自身にもエリートとしての自覚や「日本の将来を拓く」という自負があったことでしょう。彼らは非常によく学び、また堂々と発言をしていました。

「学内塾として福田さんが持ち込まれたのを、さらに一橋らしく特色をつけて、それが日本最初の単科大学創立当時の一大特色として世間を『あっ』と言わせてやろう。ことに本郷の大学を『あっ』と言わせてやろうという気持ちで、ゼミナール活動やインターゼミナール活動も盛んにやったように思います」（萩原忠三教授・昭和2年学卒）

暗い時代へ向かう前は、所属ゼミを問わない「インターゼミナール」も活発に行われました。それも学内だけでは限りません。ゼミナールもインターゼミナールも、形式は自由。教室で行われるものもあれば、研究室で行われるものも、先生の自宅で行われるものもありました。報告中心のものや討議中心のものなど、それぞれのゼミナールの個性と伝統に従って、それぞれが特色を発揮していくところに一橋大学のゼミナールらしさがあったのです。

「（恩師が研究でこもっている）そこへ、僕たちも代わるがわる1週間ぐらい泊まった。読む本はみんな違うんだけど、先生にめいめい感想を言う。するときびしくやつつけられるんです。君、そんな受け売りの勉強をしているのかいっていうような調子で。そして話が熱してくると敬称抜きでボンボン言いました」（萩原忠三教授）

「学問論争に関しては師もなし、弟子もなしです。あくまで真理探求のためにはそういうことを超越してやりました」（板垣興一教授・昭和7年学卒）

この時代のゼミナールのもう一つの特徴は、「グルンドリッヒ（根本）」を非常に大切にしたこと。どの先生もゼミナールでの指導は原典主義、時代を超えて生き残った古典という基本的な文献について学び、原典を熟読してそこから学問の精神を学びとっていきました。実学も基礎となるグルンドリッヒがあればこそ、という精神が共有されていたのです。

ある意味でさらに大きな特徴といえるのは、人間的なつながりです。

「ただ狭義の学問だけではない。世界観も論ずれば、恋愛論も

交わす。一日のピクニックに汗を流すこともあれば、山寮や富浦に合宿清遊することもある。こうなるとゼミナールは、広い意味での学問の道場。いな学生生活そのものが繰り広げられる生活の場である。教授を含めてゼミナリスTen全体が形成する共同体そのものである、といってもよい」(杉本榮一教授)

昭和15～16年ころからインターゼミ制度が影が薄くなり、それとともに個人に専属することのメリット・デメリットが生まれてきました。

「先生が一橋を愛し、一橋の学問を育てたいと思っている限りにおいて、弟子たちに一橋の歴史なり成り立ちなり特色なりというものをいつとはなしに教えていった。(中略)大学の雰囲気というものを、教室で習わんことをいっばいおそわった」(増田四郎教授・昭和7年学卒)

ときには、先生の文体や文字の書き方、たばこの吸い方で影響を受けることもありました。モノの見方・考え方が先生の小型版になってしまうこともありました。

「そこにゼミナールの危険が芽生える。先生と弟子の間に親子分の関係が形成される危険である。ゼミナールの封建化の弊が指摘され、そこにゼミナール改革への狼煙があがる。昭和の初めにはゼミナール解散論もあった」(杉本榮一教授)

ゼミナールの解散は、結局、実行に移されることはありませんでした。一つには、短所を補ってあまりある長所が、危機のなかでの論議によって再認識されたためだったと思われます。そのベースとなったのは、東京高等商業学校時代からのゼミナールの伝統とそれが生み出した数々の成果を、誰もが認めていたからだったのではないのでしょうか。そして、前記のインターゼミナールのような改革案も登場し、昭和12年には「特殊問題ゼミナール」が誕生しました。これは、景気変動とか農業問題といった重要かつ特殊な問題をテーマとし、さまざまなゼミナールに属する学生たちが一定期間に限って、一定の教授の指導の下に形成されるインターゼミ的な臨時ゼミナール。経済研究所のゼミナールのルーツは、ここにあるといわれています。

以上、歴史を追いながら「ゼミという伝説」の系譜を概観してきました。次はもう少し踏み込んで、伝説の内側を探ってみたいと思います。「一橋人」が誰しも「伝説」と認める二つのゼミ、「高島善哉ゼミナール」と「中山伊知郎ゼミナール」をクローズアップします。

参考文献／「一橋のゼミナール」

昭和53年3月31日発行、一橋大学学図史編纂委員会著、一橋大学七十五周年記念刊行、Hitotsubashi in Pictures 1950年





若かりし頃の高島善哉先生

大学の伝統
一橋大学のゼミナール

魂の師との出会い

「高島善哉ゼミナール」

高島善哉ゼミナールは、先生が東京商科大学学部助教授となった昭和13年4月に開講、一橋大学を退職される1年前の昭和40年3月まで、戦中・戦後の27年間にわたって行われました。その間、先生の指導を受けた「ゼミテン」の総数は301名にのぼります。また先生は、高島学派といわれるほど多くの研究者を社会科学界に送り出しました。

高島善哉ゼミナールがいまだに「伝説」として語り継がれている理由の一つは、もちろん先生の学問上の業績にあります。日本の社会科学の歴史の上で、先生はひとときわ輝く存在であり、社会体制・階級・民族など現代に生きる人間にとって重要な問題を取り上げ、丁寧に解明しながら、それを通じて社会科学的なモノの見方とはどういうものかをわかりやすく語った『社会科学入門』（1954年・岩波新書・60万部）が現在でも不朽の名著とされていることは、よく知られているとおりです。

しかし、「高島善哉ゼミナール」が「伝説」となった原動力は何よりも先生と学生の絆の深さ、とりわけ学生が終生、先生に強い敬愛の念をもちつづけていることにあるのではないのでしょうか。もちろん他のゼミナールでも、そこには深い人間的な絆が息づいていますが、「高島善哉ゼミナール」は、より凝縮されたかたちで「一橋らしさ」が息づいているように思われます。次のようなエピソードは、学生たちの先生への敬愛の念を雄弁に物語っているといえるでしょう。



長田五郎氏

横浜市立大学名誉教授
1944年予科入学
1950年学卒



村上利雄氏

「高島善哉の会」会長
1938年予科入学
1943年学卒



相良重雄氏

「高島善哉の会」副会長
1942年予科入学
1947年学卒

先生の研究活動をどこまでも支える

高島善哉先生は昭和41年一橋大学を退官されましたが、そのとき先生の眼は完全失明に近い状態でした。そこで高島ゼミ出身者の会である「蘇水会」は、退職後も先生が研究をつづけられるよう研究助手の人件費を提供するための募金を行いました。さらに、先生が喜寿を迎えられる前年の昭和55年には、ゼミテンと東京商科大学予科出身者が中心となって「高島善哉の会」を結成。当時完全に失明されていた先生の研究助手の人件費を提供するため「高島善哉研究基金」の募金を行いました。この基金により、先生は平成2年1月に85歳で逝去されるまで研究をつづけられました。

師なきあとも業績を世に問う

ご逝去後の平成3年12月、「高島善哉の会」は、高島善哉著『市民社会論の構想』（新評論刊）を刊行（編集人は、同会の会長・山田秀雄一橋大学名誉教授、当時）。平成9～10年には、昭和55年から平成2年までの10年間、先生の研究助手を務めた渡辺雅男一橋大学教授が、『高島善哉著作集・全9巻』を編集、こぶし書房より刊行しました。

さらには、こんなエピソードもあります。

教えは一人一人の胸に生きつづける

平成12年、神奈川県百貨店さいか屋の故岡本良平会長が収集したアダム・スミスやホッブス、マルサスなど社会科学の貴重な古典約300冊が「市民社会文庫」として一般公開されました。岡本氏は、高島先生から「どんな職業に就いても学問を生かすときはくる」と助言されたことを忘れないで、昭和54年から約20年かけて古典を収集。生前から公開を決めていたといえます。

そして、「先生を迎えるために」と、実業家として成功した後、自宅に先生用の居心地のよい部屋を作った卒業生もいます。卒業してから長い年月がたち、それぞれの人生を歩んだのちも、高島善哉先生はなおも「心の師」でありつづけたのです。

一橋寮生にとって 輝ける星であり導きの糸でした

なぜ高島善哉ゼミナールから、一生にわたる心の師弟関係が生まれたのでしょうか。その大きな理由の一つは、先生が予科で講義を行ったことです。

予科とは、戦前の高等教育機関の一つで、官公立の単科大学に設けられた旧制高校に相当するもの。当時は5年制の中学を卒業（または4年修了）後、旧制高校か大学予科へ進学するというのが通常のステップでした。東京商科大学予科は、3年制の全寮制教育を行っており、17歳から20歳という多感な年齢の若者が先生の薫陶のもと寝食をともにしていたのです。高島善哉先生は、昭和3年4月に予科講師、昭和10年に予科教授になられ、昭和21年10月から昭和24年7月まで予科長を務めておられました。昭和19年当時の学生数は、一学年100人程度。寮で開かれた全寮晩餐会には毎回、高島善哉先生と太田可夫先生の講話がありました。当時の寮生の一人、長田五郎・横浜市立大学名誉教授（昭和19年予科入学）は、次のように振り返ります。

『「歴史的・社会的な人間の形成」の強調と、『本を読むことだけが学問ではない。生活すること自体学問である』と『実践としての学問』の重要性を主張する高島先生の言葉は、太平洋戦争下の勤労動員で、書物を読む時間が次第に少なくなってきた、一橋寮生の心の支えとなっていました』

軍国主義と戦争の足音が近づいてくるなか、「自由は死もて守るべし」という言葉で終わる寮歌が公然と歌われていた一橋寮の精神的支柱が、高島善哉先生だったのです。同じく戦時下を一橋寮で過ごした相良重雄氏（元旭硝子アメリカW社社長・「高島善哉の会」副会長）は、「生き方を背中であえてくれた父親のような存在」と語ります。「先生はときには宿直室に寝泊まりして、学生を励ましてくれました。社会学者であることから特高に眼をつけられていたなか、実に巧みな比喩と論理で『きみたちは戦争で死んではいけない』と、学生に指針を与えてくれたんです。『きみたちの仕事は戦後にある』と、言われたことはいまでも忘れられません』

正論が正論として通らない時代に、どこまでも信念を貫かれた高島善哉先生は、人生とは、生きることとは、と模索する年代の



昭和15年卒から昭和23年卒までのゼミ生とともに

若者には、父親以上の存在だったのかもしれませんが。

「苦しい時代に正しいことは何かを、身をもって教えてくれた高島先生は、一橋寮生にとって輝ける星であり、導きの糸でした」(長田氏)

人間対人間の教育 自分の頭で考えるゼミ

「宅地のなかに別棟二階建ての書庫があって、外から本が見えた」という逸話があるように、高島善哉先生は精力的な勉強家であり、幅広い視野と深い見識をもつ学者でした。予科の教員時代から一橋大学を退官されるまで、先生の教育哲学は自発性の原理に基づくものであり、「自分の頭で考える」主体的人間の形成を何より大切にされていました。理論やイデオロギーの押しつけ教育は一切なし、早急に結論を出すことなく、「自分自身で考えること」をつねに学生に説かれていたのです。教え子の一人の村上利雄氏(「高島善哉の会」会長)は、「世の中を見る眼を教えてもらった」と語ります。

「先生の教えを通して、社会や人間、民族や国家といった大きな問題を解明する根本的な視点を、自分のものとして理解させてもらいました。先生の教えは、心のなかの支柱としていまでも生きています」

高島善哉ゼミナールは、「自分の頭で考えるゼミ」として定評がありました。一年次と二年次の学習の中心テーマは、アダム・スミスとマルクスの思想体系の比較研究でしたが、卒論のテーマはまったく自由。政治・経済・社会・文化の各分野にまたがってお

り、文学を選ぶ人もいたといいます。このふところの深さ、眼病から留学がダメになりdepressionの苦しみを克服され、亡くなるまで学問をつづけた強靱な精神、アイロニーを好み、学生を愛した人間味豊かな人柄が、ゼミテンたちに大きな影響を与えたのは、ごく自然なことといえます。学問でも一流、人間としての器の大きさでも一流、ヒューマニストであった高島善哉先生の薫陶を受けたゼミテンたちは、幸運であったといえるのではないのでしょうか。そして、「ゼミナール」を中核として、人間対人間の教育を受けられる機会が豊富に存在していたこと、その伝統がいまも受け継がれていることは、一橋大学の大きな資産だといえます。

高島善哉先生の逝去から14年たった今年7月、先生の生誕100年を記念する会が開催されました。主催は、「高島善哉の会」。その会員は477名と、ゼミテンの総数を大きく上回っています。



2004年7月13日「高島善哉先生生誕100年記念の集い」が会員の手によって催された。壇上で講演をするのは、「高島善哉著作集・全9巻」を編集した高島先生の孫弟子にあたる渡辺雅男(一橋大学社会学研究科教授)

取材インタビューは、自宅内に高島先生をお迎えする書斎を設けた村上(「高島善哉の会」現会長村上利雄氏)邸にて行われた。しかし自宅完成時、先生は既に亡くなられており、先生はその部屋を使うことはなかった



学問は一生の事

「私の経済学は福田徳三先生に始まる。一橋にきて福田先生の講義を聴けなかったら、おそらく私は経済学者になっていなかったに相違ない」

中山伊知郎先生は、その著『わが道 経済学』のなかでこう述べています。大学とはいうまでもなく学問をする場です。その本道と出会い、深く向き合う場の一つがゼミナールといえるでしょう。一橋大学におけるゼミナールの源流を作られた福田徳三先生の精神を骨太に受け継いだ中山伊知郎先生は、次は自分が導き手となって多くのゼミナリストに真の学問とは何かを伝えていきました。「中山伊知郎ゼミナール」から日本の経済学を担う研究者が次々と誕生したことは、決して偶然ではないということです。



一橋大学名誉教授（1955年経済学部卒）
花輪俊哉

価値のあるものに謙虚であり 公平で温かい視点を持つ

近代経済学に大きな足跡を残した中山伊知郎先生は、1898年生まれ。最初にゼミナールを受け持たれたときは、まだ30代初めの若さでした。それから昭和37年度の最後のゼミナールまで、30年以上にわたって指導されたのでした。その間、教授から学部長へ、学長へと歩まれるにつれ、大学人としての責任は重くなり、忙しさはますます募りました。しかし、中山伊知郎先生は学長になってからもゼミナールを開講しつづけました。その時期のゼミテンの一人、花輪俊哉・一橋大学名誉教授は、次のように語ります。

「学長であり、経済学の第一人者のゼミでしたから、やはり緊張しましたね。時代に役立つ学問という信念をもっておられたので、講読にはつねに新しい本を選ばれていました。バッドやロビンソンなど、専門家が読む本を学部生に読ませるんです



花輪名誉教授のために書かれた、中山先生による就職の推薦状



左：中山先生、御令嬢と一緒に、中山ゼミ生
右：「学問は一生の事」の編纂の前で花輪ゼミ生とともに

から、学ぶ方は必死でした。準備不足だと、容赦なくビシッとやられる。『レポートの内容がなっていない』と、怒って帰ってしまわれたこともあります」

中山伊知郎先生は学生時代、「福田徳三ゼミナール」で「厳しい指導のもと、Cournot、Gossen、Walrasの主著を読破」しました。学生だからと入門書や解説書で妥協はしない、若いうちから本物にふれさせ、学問の奥深さや学問に対する取り組み方を学びとらせる。これも、一橋大学のゼミナールの伝統といえるでしょう。昭和27年卒のゼミテン、大津寄勝典氏は、「中山伊知郎ゼミナール」の会誌、「一路会誌」の中山先生生誕百年記念特集号のなかで、次のように書いています。

「昭和24年、旧制学部入試に合格した私は、早速中山伊知郎先生のゼミナールに入れて頂きたいという希望をもった。先生が近代経済学の泰斗であられることが大きな理由ではあったが、加えて次の刺激があった。昭和11年の春に出たばかりのケインズ『一般理論』を一読された先生は、直ちにその年度のプロゼミナール用書に選定されたが、それに参加された4人グループの研究成果を、先生は卒業の土産にと『ケインズ一般理論解説』として出版された点である」

この挿話にみられるように、中山伊知郎先生はつねに価値あるものに謙虚であり、学生に対しても公平で温かい視線をもちつづけておられたのです。中山先生が学界の第一人者でありながら「学問の前では平等」の視点を貫かれたこと、ゼミテンとの間に深い信頼関係が築かれていたことも、「中山伊知郎ゼミナール」を長く語り継がれる「伝説のゼミ」にした一因といえるのではないのでしょうか。海外の大学へ留学したとき、先方の指導教授から「これまでどんな本を読んできたか」と聞かれることもよくあります。そのとき学部や院のゼミナールで読んだ本をあげると、「素晴らしい。誰が選択したのか」と、高い評価を

受けるケースも多いといえます。これも、指導する先生の見識や一橋大学のゼミナールのレベル高さを、端的に示すものといえるでしょう。

一生して悔いはない。 「学問は一生の事」

中山伊知郎先生は、学問に対してはどこまでも厳しい姿勢を貫きました。ゼミの間は禁煙、というのも有名な話です。ただし、厳しい一方ではありません。その注意の仕方にユーモアが漂うのも、先生の人柄といえます。

「先生は『キミ、タバコは止めなさい。私もガマンしてるんだから』と言われてました」（花輪名誉教授）

花輪名誉教授をはじめ多くのゼミテンと中山先生が学長を務めていたころの学生には、忘れられない言葉があります。「学問は一生の事」「学問は一生の仕事」という、中山先生の言葉です。

「中山先生はよく『学問は一生の仕事』と言われたが、いかなる職業についていても、つねに『一生の仕事』として全力投球することがいかに大切か、つまり『継続は力なり』ということ、折にふれて教えて下さったのだと思われる」

昭和22年9月卒のゼミテン、伊藤善一氏は「中山伊知郎ゼミナール」の会誌、「一路会誌」の中山先生生誕百年記念特集号のなかで、こう書いています。この記念特集が出版されたのは、平成10年。つまり、中山先生のこの言葉は、卒業後50年を経てもゼミテンの心のなかに色あせることなく刻まれつづけてきたということです。

「卒業式でも言われましたし、私が大学院を卒業するときは、為書とともにぶっつけ本番で書いてくださいました。それから折にふれて、先生はこの言葉にどういう意味を込められたのだ

ろうと、考えつづけてきました。若いころは、あわてないでゆっくりやれ、という意味に解釈していましたが、最近では『学問を一生してきて悔いはない』という意味だったのではないかと思ったりしています。先生の真意はわかりませんが、ずっと心のなかで温めてきた言葉です」(花輪名誉教授)

ちなみに花輪先生は、この中山先生の書を額装し、いまでも自宅に大切にしまわれているといいます。

学生の主体性を尊重し、 しかし頼まれたことは断らない

学問に厳しく、大の勉強家であった中山伊知郎先生は英・独・仏の三か国語に堪能で、俳句や文学への造詣ももっておられました。ゼミナールの場を離れたときは、「屈託のない笑みを絶やさず、つねに自然体で個々の事柄に接せられた」と、昭和26年卒のゼミテン、堤敏夫氏は前出の記念誌に一文を寄せています。

「ゼミの合宿では、先生と一緒に麻雀をやったりしました。

先生が賞金を出してくれたのはいいんですが、自分が勝ってもっていかれる(笑)。一緒に風呂に入って、文字通り、裸のつきあいをしたこともあります」

高島善哉先生もそうでしたが、中山伊知郎先生の場合も、ゼミの打ち上げなどはご自宅に招かれることも少なくなかったといえます。戦後の貧しい時代、学生にとってはこれも、ゼミテンの嬉しい特権だったことでしょう。

卒論のテーマは学生に任せたように、中山伊知郎先生は成長した学生の自主性を尊重していました。反面、頼まれたことは、イヤな顔一つせずに引き受けてくださったといえます。花輪先生は、次のようなエピソードを披露します。

「大学院の試験に合格しなかったら就職しようと思っていたんです。落ちるかもしれないという不安があったから、先生に就職先への推薦状を書いてほしいと頼みにいきました。先生はその場で、毛筆をとってスラスラと書いてくださった。簡潔な文面のなかに、私の卒論テーマや性格を端的に表現されていたことが、強く印象に残っています。ゼミテン一人一人のことを、本当によく把握されていました」

中山伊知郎先生自筆の扁額
花輪名誉教授が卒業時頼んで書いていただいた



「高島善哉ゼミナール」と「中山伊知郎ゼミナール」、

この二つの伝説のゼミに共通しているのは、手作りの全人教育だったこと、

そして学生がその教育を真正面から受け止め、大きく成長していったことでしょう。

だからこそ、一橋大学のゼミナールは制度としての枠を超え、語り継がれ、受け継がれてきたのです。

21世紀という新しい時代のなかで、一橋大学のゼミナールが今後どのような方向へと向かい、

どんな姿をみせるのか定かではありません。

ただ一つ言えることは、「伝説のゼミ」を生み出した土壌と伝統は、

いまなおしっかりと息づいているということです。

学部教育専門委員の目から見た 一橋のゼミの現状

一橋大学の教育とゼミとは切っても切れない縁がある。

学生の学びたいという意欲を教師が全身全霊で受け止め、全人格を傾けて全人教育を施したのが、その始まり。
単なる少人数教育とは趣を異にするからこそ、100年の歴史を経た現在でも、「一橋のゼミは何かが違う」といわれているのである。
発足以来のゼミの精神はどう息づいてきているのか？ また、時代の変化にともなって、どう変わろうとしているのか？

各学部の学部教育専門委員の先生方に、率直な意見を聞いてみた。

《学部教育専門委員》



商学部教授
万代勝信
Katsunobu Mandai



経済学部助教授
古沢泰治
Taiji Furusawa



法学部教授
青木人志
Hitoshi Aoki



社会学部教授
古茂田 宏
Hiroshi Komoda

まず、各学部の現状や 先生ご自身のゼミ観から…

青木 ゼミには、私自身を含めて卒業生が非常に愛着をもって
います。ゼミ自体が楽しいものですし、その重要性は増しこそ
すれ、減ることはないでしょう。ただ、法科大学院ができた
ので、法学部教員の業務が増えてきました。これまでのよう
にすべての教員がゼミを持つことが困難になってきましたが、
それでも、現在の1ゼミ平均7名程度のゼミ生が、9～10名、
多くても15名程度で収まるでしょう。

古茂田 私は本学の卒業生ではないので、赴任して初めて一橋
のゼミを知ることになったわけですが、ショックを受けました
ね。私の出身大学（東京大学）では、ゼミは単なる時間割の1
コマでしかありませんでしたから。学生も何ゼミ所属という意
識はなくて、何学科所属という意識でした。ところが、一橋大
学ではゼミへの帰属意識が驚くほど強い。なかば冗談話で聞い
たところでは、以前は「二君に仕えず」といった徒弟制的な雰
囲気さえあったそうで、そこまでいくとどうかなと思いますが、
私はこんな親密なゼミのあり方が気に入りましたし、いまでは
愛着を感じています。欠点をいえば、学生たちがゼミに全力投
球するあまり、他の勉強が多少疎かになってしまう傾向がある

ということでしょうか。でも、逆に他の授業に熱を入れるあま
り、ゼミでの研究を薄めてしまっては寂しい。うまくバランス
が取れるような工夫が必要でしょうね。

古沢 同感ですね。5年一貫カリキュラムによって、ゼミはど
うなのかと聞かれることがあります。しかし、この新しい仕
組みとゼミ重視とはまったく矛盾しません。学習は一夜にして
なるものではありませんから、あくまで積み上げ方式で行って
いくのです。1～2年では知識のベースをしっかりと身につけ、
3年からはゼミで自分の興味のあるところを学ぶわけです。そ
れにはゼミが向いています。

万代 私は指導教官に「ゼミはファミリーである」と言われたの
をよく覚えています。だから、「無断で休めばけしからんという
ことよりも、心配するじゃないか」と続きます。ですから、先生
は飲み会にも付き合いますし、4泊5日の合宿にも参加してくれ
ました。教官によって運営に違いはありますが、このファミリー
感覚は共通しているのではないのでしょうか。

昔と今とでは、ゼミに対する 学生の意識に変化はありますか？

万代 先日ゼミの3年生に、「先生、鐘が鳴ったら帰してくださ
い」と頼まれました。そこで、「ゼミ以上に重要なものがある

の？」と聞いてみたのです。すると、「はい、サークルです」という答えでした。このこと自体は決して悪いことではありませんが、かつてに比べるとゼミを授業の1つとして受け止めている学生が増えてきたように思われます。

古沢 最近では留学帰りの先生が増えてきたこともあって、私には教員の方が欧米流にドライになってきたように思われます。一方の学生側が求めるものは、そう変わっていないと思います。

古茂田 ベルが鳴れば授業が終わるのは当然で（笑）、続けてやっている方がおかしい——ゼミについてもこんな風に考える学生が増えてきたのですね。それは先生方も同様で、なかには、ゼミをワン・オヴ・ゼムとして受け止めている先生もいないわけではあります。しかしそれはそれで仕方ないことだと思います。

青木 年齢や教員のキャラクターの違いもありますね。私自身が学生の時は、ゼミの先生と40歳近く年齢差があって、研究室に行くのが少し怖かったくらいです。でも、それだからこそ、病氣入院中に手紙を頂戴したり、御自宅に呼んでいただいたりしたときの感激は大きかったし、大学院進学や就職という人生の岐路で、いつもゼミの先生に導いてもらったという実感があります。一方の私は、初めてゼミを持ったとき、学生との年齢差が10歳ほどしかなかったこともあり、ゼミ生とはかなり濃密な付き合いをしています。でも、現在の学生とは20歳ほど年齢差があるので、年齢差にふさわしい接し方を、恩師の先例から学ぶべき時期が来ているのかもしれない。

万代 元一橋大学学長の阿部謹也先生が、上原専祿ゼミの思い出を書いていらっしゃいました。

「ゼミに入れてもらって、お宅までいって…」ここに一橋のゼミの原点があります。食事の世話にまでなっているのです、先生のお宅に行くときまず奥様にご挨拶するとか。

青木 面白いのは、城山三郎さんと山田雄三先生の「二人ゼミ」。山田先生がお亡くなりになるまで、毎年先生のお宅で二人だけのゼミを行ったというのです。普通のゼミとは違いますが、いかにも一橋らしいことだといえるでしょう。

ゼミは変わっていきますか？

青木 たしかに、学生や教員の意識に変化している部分もあります。でも、ゼミは単なる授業科目ではないという意識は、なお強固に受け継がれていると思います。ふだんあまり授業に出ずに部活動に明け暮れている学生であっても、ゼミには出てくるし、終

了のチャイムを気にしないゼミもかなりあるはずです。親子や兄弟姉妹が揃って一橋に学ぶ例が多いのも、ゼミ制度の存在と無関係ではないと思いますし、ゼミ制度の評判を聞いて留学先に一橋を選んだという外国人学生もいます。こうした伝統は一朝一夕ではできませんから、大切にしたいですね。

万代 商学部でもゼミの形を変えていこうといった動きはないですね。ゼミは人間教育の場です。それも直接指導するというより、教官の学問やゼミに対する姿勢を見て、学生が学んでいくのです。

古茂田 教官と学生のつながりも重要ですが、学生同士の関係も重要です。私のゼミでは人数が増えたこともあって、「出席ノート」をつけてもらっています。そこに、この一週間にどんな本を読んだかも書いてもらっています。難しい本ばかり読んでいる学生もいれば、剣豪小説ばかり読んでいる学生もいる。それを見ると学生のキャラクターが分かってきます。それと、学生には見栄も重要なんですね。「あいつがあんな難しい本を読んでいるのなら、オレも読んでみるか」…とか。学生同士で刺激し合うのはいいなあと思っているんです。

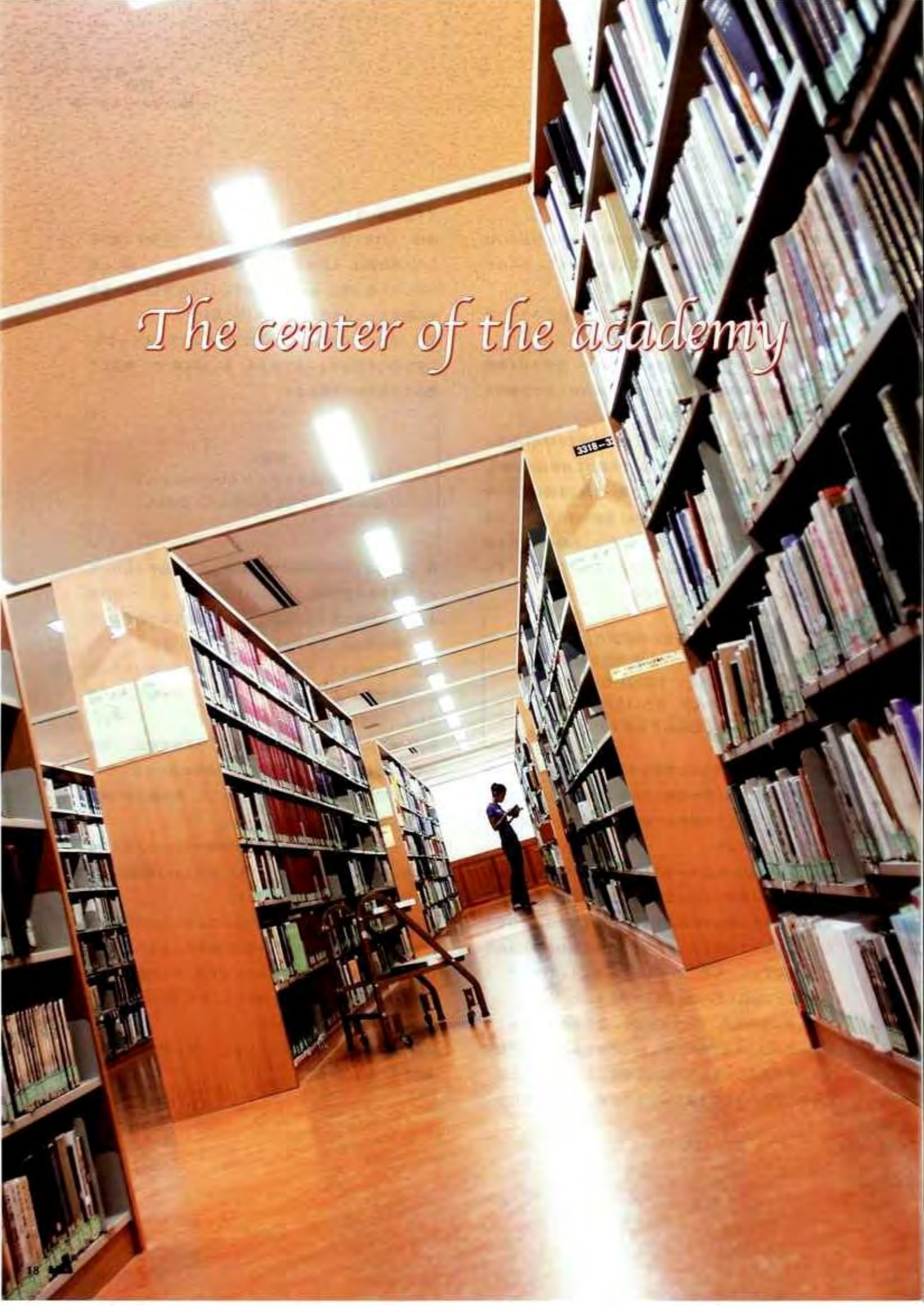
青木 ゼミの進め方は、学部の違いより、むしろ教員の個性によって違ってくるのではないのでしょうか。また、同じように指導しても、年によって一体感の違いがあります。学生の顔ぶれによっても、ゼミの姿は違ってくるわけです。ところで、昔と今とで最も違ってきたのは、女性と留学生が増えたことです。学生に対する思いは変わりませんが、多様な価値観を認めあうことで、接し方は変わってくるように思います。ゼミが変わっていくとしたら、こうしたことがひとつの要因になるでしょう。ちなみに、私のゼミは、懇親会や合宿も、禁酒禁煙です。伝統的なゼミコンパのイメージと違いますが、十分に楽しめますよ。

古茂田 東大は放し飼いの。徒弟制的ではなく、やる人はやるという感じでした。アットホームというよりは学生と教員の間には距離感がありました。一橋は訓練が行き届いているような……。これが一橋のゼミの伝統の強みですね。大学改革を進めるために、何か新しいことをやろうという姿勢があります。それも重要ですが、私は「ゼミがあるじゃないか」と強調したい。これだけのものを、新しく作るのとは不可能に近いと、外部からの目で見るとつくづくそう思います。サムシング・ニューばかりを追わずに、ゼミを大事にしてもらいたいですね。

古沢 ゼミは大学生活の中心です。学生時代は必ずしもそうは思っていませんでしたが、今も付き合いが深いのはゼミの友人ですし、自分の先生との関係などを振り返ってみると、いまではそう確信を持っています。

2004年7月28日座談会より

The center of the academy



大学図書館。それは一橋生の自負によって育てられてきた

大学図書館は、その大学の研究教育の水準や特性などを示す重要な指標の一つです。社会科学の各分野に専門化しつつ、同時にそれらの総合をめざす一橋大学にあって、大学附属図書館もまたそれに歩調を合わせて学術情報を収集・蓄積してきました。そして現在、蔵書冊数、受入冊数、雑誌種類、貸出数、図書経費による総合評価（朝日新聞2001年）で、全国の大学図書館の中で第1位にランクされるまでになっています。メンガー文庫をはじめとする社会科学分野の貴重文庫や古典資料のコレクション、西洋古典講習会や修復保存のノウハウなどの存在を加味すれば、その評価はさらに高まることでしょう。

この一橋大学附属図書館がどのように形成され、どのような未来をめざしているのか、これから4回にわたって見ていくことにします。第1回となる本号では、その沿革を中心に、一橋大学附属図書館の概要を池間誠館長にお話いただきました。

一橋大学附属図書館長
社会科学古典資料センター長
経済学研究科教授

池間 誠
Makoto Ikema



存亡の淵を渡りつづけた歴史が、 自主自立の精神を育んだ

一橋大学は本年4月に法人化されました。国に代わって「国立大学法人一橋大学」という新しい国立大学法人が「一橋大学」の設置者になったわけです。しかし、これまでの歴史を振り返ると、本学の設置者は何度も代わっていて、その過程では何度か存亡の岐路にも立たされています。まかり間違えば今日の一橋大学は存在しなかった。そういう歴史が、本学関係者の結束力を高め、ひいては本学図書館を他にあまり類のない大学図書館に育て上げる礎にもなっているのではないのでしょうか。図書館の歴史を見る前に、まずは本学の歴史をおさらいしておきましょう。

本学の前身は明治8年9月に森有礼が銀座尾張町に開設した私塾「商法講習所」にまでさかのぼります。この私塾が同年11月、東京会議所に移管され、さらに翌年5月には東京府に引き渡されます。開校して1年足らずの間にも設置者が2度代わっているのです。

これには、創設者である森有礼の画策もあったのだらうと思います。というのも、彼はもともと教育事業を国ないし地方自治体の仕事と考えていて、商業学校の開設も政府に進言すればすんなり受け入れられるものと考えていた。ところが政府には別の構想があって、彼の建議は受け入れられなかった。そこで、とりあえず私塾という形で開校し、時期を見てこれを国の教育機関へと昇格させようと考えていた。そのステップの一つが東京府への移管だったというわけです。一橋の歴史は汗と涙の昇格の歴史だという人がいますが、それはまさに創設直後から始まっていたのです。

設置者の鞍替えはその後もつづいて、明治17年には農商務省の直轄になり、「東京商業学校」と改称します。さらに翌18年には文部省の所轄に移り、かつ最初から官立でスタートしていた東京外国語学校および同校附属の高等商業学校と合併しています。この合併は、神田一ツ橋にあった

旧東京外国語学校の校舎や図書館を継承しながら、校名は旧東京商業学校を継承するというものでした。

ともあれ、明治20年には「高等商業学校」となり、30年代に入ると学内外で本学を基盤とする商業大学を設置したいという要望と運動が高まります。帝国議会でも商業大学設置の建議案が通過しました。ところが、文部省からは、帝国大学（現東京大学）法科大学内に新たに経済科と法科を設け、本学の専攻部は廃止するという再編案が発表されるのです。つまり、リストラで肩を叩かれたようなものです。本学関係者がこれに反旗をひるがえしたのが、明治41年から42年にかけてのいわゆる申西事件です。

このリストラ案は切り抜けたものの、大正2年にはふたたび本学を帝大に併合するという再編案が浮上する。これも未然に防ぎ、大正9年、ついに大学昇格の悲願を達成します。「東京商科大学」の発足です。ところが、喜びもつかのま、大正12年の関東大震災でその大学校舎の大半が倒壊、焼失してしまうのです。

この被災も乗り越え、昭和2年にはキャンパスを神田一ツ橋から現在の国立に移します。そして昭和5年にはその

国立キャンパスに新しい図書館が竣工します。こうして現在に至る一橋大学の基盤を整えたんですが、昭和6年、今度は大蔵省から、予科と専門部を分離して予科は廃止するというリストラ案が出される。またまた存亡の岐路に立たされることになったわけです。これに対する全学をあげての反対運動が、いわゆる龍城事件です。

その後、国内は戦時体制に入り、大学予算が逼迫する中でも、研究教育は営々とつづけられたのですが、やがて図書館をのぞく敷地校舎のほとんどが軍に貸与され、大学としての機能を果たすこともままならない状態に追い込まれます。キャンパスが軍需工場と化することで重点爆撃に脅かされることにもなります。さらには「東京産業大学」と改称させられたりもする。戦時下に商法の研究教育はふさわしくないというわけです。

戦後の「一橋大学」としての歴史は割愛しますが、こんなふうには本学は何度も廃校の淵を渡ってきているのです。そしてそのことが、本学の国立大学らしからぬ校風、すなわち他に頼らず自らの力で立つという一橋スピリッツを育んできたといってもいいでしょう。

図書館の拡充を 最高学府への昇格につなげる

こういう歴史の中で、本学図書館はどのように形成されてきたか。

明治9年、商法講習所が東京会議所から東京府に引き渡された時、その引き渡し物件に含まれていた書籍は、わずか55冊にすぎませんでした。授業に用いられていたのは欧

米から取り寄せた簿記や算術の原書で、当時、そういう書籍はそう容易に入手できるものではありませんでしたから、私塾としてスタートした生徒数50名たらずの講習所にとっては、これが精一杯だったのかもしれません。

本学が図書室と呼べるような施設をもったのは、東京外国語学校と合併し、その書籍庫を継承してからのことです。東京外国語学校には開成所や洋学所から受け継いだ7000冊ほどの洋書や漢籍が収蔵されていました。加えて明治7年の開校以来、毎年1000冊近くの書籍を購入してもいた。それがそのまま本学の蔵書になったわけです。その大部分は東京外国語学校がふたたび分離独立する際に同校に戻されるんですが、戻されないまま今も本学図書館に残っている貴重図書も少なくありません。

ともあれ、こうした書籍をベースにして、明治27年には木造2階建ての書庫と閲覧所をもつ図書館が落成します。総坪数67坪ほどの小さな図書館ですが、本学の図書館の歴



商法講習所時代の閲覧室





上：商法講習所時代の図書館

中：御大典記念で建設された図書館（神田一ツ橋）

下：昭和3年キャンパス移転に伴い、国立キャンパスの中央部に現図書館が建設された

史はここから始まるといっていいいでしょう。

明治30年代に入り、商業大学への昇格の気運が高まるにつれ、図書館の拡充についても学内外の関心が高まり、35年には3名の教授が図書委員に就任して図書館の運営強化にあたることになります。これに呼応して学外からも記念文庫の寄贈が相次ぎ、39年には図書購入費にあてるための「奨学資金」までもが寄付されるのです。のちにもふれることになりますが、本学図書館が国費のみではとうてい購入しきれない多数の貴重書籍を収蔵し、かつ世界的な著名コレクションを手に入れたのは、こうした篤志がその後も絶えることなくつづいたからです。

とはいえ、明治42年時点での蔵書冊数はやっと5万冊をこえるくらいのもので、商業教育における最高学府を自認するにはいささか貧弱なものだったといわざるをえません。文部省から本学のリストラ案が突きつけられるのは、ちょうどその頃のことです。

大学昇格を勝ち取るか、はたまた他校に吸収されてしまうのかという大きな岐路に立たされたわけですが、しかし、そのことが本学関係者の結束力をますます高めることにもなったのです。大正3年には佐野善作教授が本学出身初の校長に就任し、自主自立への体制を整えるとともに、予科、本科、専攻部それぞれの学科課程を大幅に拡充し、主要学科の細分化をほかり、同時に専攻部に経済科を新設するなど、総合化への道も開きます。一方、卒業生たちも母校擁護助成を目的とする「如水会クラブ」を結成し、すでに組織されていた同窓会と諸って、大正天皇の即位御大典記念事業と銘うった大学図書館の建設と寄贈を決議します。これは、天皇の御大典を記念する図書館であれば、政府もそうむげには取りつづせないだろうという深慮遠謀もあつてのことだと思いますが、裏をかえせば、それくらいに存亡の危機を感じていたということです。

ともあれ、こうして大正6年、鉄筋コンクリート造4階建ての書庫と、木骨煉瓦張造2階建ての閲覧室をもつ近代的な図書館が落成します。ちなみに、この新図書館の建築には5万円の予算が組まれ、如水会が3万5000円、同窓会が1万5000円を拠出したんですが、実際には6万円近くの費用がかかり、その不足分は個人の寄付金でまかなわれています。国の力を借りず、自分たちの力だけでつくりあげた図書館だったのです。

大正9年、本学が「東京商科大学」として念願の大学昇格を果たした背景には、この図書館の存在もあずかって大きかったのではないのでしょうか。

図書館を社会科学における 研究教育の中心に置く

図書館は、もちろん、箱としての建物だけで語れるものではありません。御大典記念図書館という、箱としては他に恥じることのない大学図書館はできたものの、大学昇格当時、蔵書冊数はまだ6万冊に満たず、図書館の運営や目録整備にいたっては素人仕事の域を出なかったようです。

本学図書館に近代的な運営技術が導入されたのは、大正10年、当時の図書館主事だった三浦新七教授が、台湾総督府図書館長だった太田為三郎氏を実質的な図書館長として本学に迎え入れてからのことです。太田氏は図書館学のエキスパートで、文部省も新設の文部省図書館教習所に迎え入れようとしていた。それをいわばヘッドハンティングしたわけです。その太田氏が、目録編纂事務のエキスパートだった小長谷恵吉氏をはじめとする優秀な図書館員を呼び寄せ、図書と図書館の本格的な整備がスタートすることになります。言葉にすれば簡単なことですが、蔵書の多くが欧米から取り寄せた多岐にわたる専門書で、かつ図書の分類表も定まっていないという中での整備ですから、これはとてつもなく大変な仕事だったと思いますね。

一方、蔵書の充実にも力が注がれ、大正10年にはドイツ留学中の孫田秀春教授の奔走によってゲルマン法の大御所ギールケ教授の遺蔵書が、11年にはやはりドイツ留学中の大塚金之助助教授ら6人の留学生の奔走によってオーストリア学派の始祖メンガー教授の遺蔵書が本学図書館に収蔵されることになります。ギールケ文庫とメンガー文庫は今も本学が世界に誇る二大コレクションですが、その購入を大学に進言し、売買の交渉にあたったのが20歳代、30歳代の留学生たちだったということには驚かされます。また、その購入資金のめども立っていない中で、購入にゴーサインを出した佐野学長や三浦図書館主事をはじめとする当時の大学当局の勇断にも感服させられます。ちなみにメンガー文庫の購入価格は約7万円。図書館の建設費用をも上回る額でしたが、それを支弁したのも卒業生からの寄付金でした。

こうして大学図書館の近代化が緒についた矢先の大正12年、関東大震災によって本学も校舎の大半を失い、村瀬文庫をはじめとする多くの書籍や研究資料を失うことになります。しかし、図書館の蔵書と、三井ホールに留め置かれ

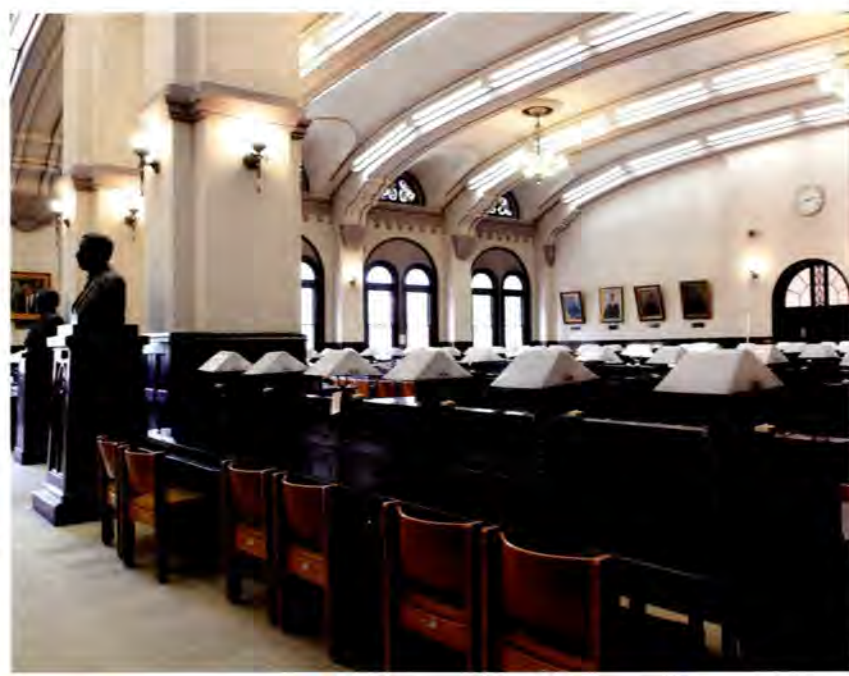
ていた購入直後のギールケおよびメンガーの両文庫は、駆けつけた学校関係者の機敏な消防活動によって焼失を免れた。これは、どんなに感謝しても感謝しきれないほどのことです。

焼失を免れたことによって、本学図書館の蔵書を研究利用したいという学内外の要望がますます高まり、図書館員のみならず全校の教官の共同作業として図書目録の整理が進められることになります。同時にまた、わが国有数の蔵書家として知られた左右田喜一郎博士の遺蔵書をはじめ、本学関係者のコレクションが次々と寄贈されるようになり、この頃から蔵書の増強にはさらに拍車がかかるのです。

そうした中で、大学の国立移転と予科の小平移転が決まり、図書館も新築されることになります。この図書館が、今もその姿をとどめるとおり、キャンパスの正面中央を陣取り、しかも館内に研究室や指導室を組み入れているのは、社会科学における研究教育の中心は図書館であるという本学関係者の総意を具現化したもので、本学が他校に先駆けて実現したことです。

新図書館の書庫は20年先を見越して設計され、その書庫には総延長およそ1万メートル、30万冊の書物を収容可能という5層オール・スチール製の書架が採用されています。もちろん当時最新式の書架です。

折しも世界恐慌の波が日本にも押し寄せ、卒業生の就職もままならないという時代で、しかも当時の国立には遊べるようなところがなかったからでしょう、この新しい図書館はオープン当初からいつも学生たちで満員盛況だったと聞いています。



一橋大学附属図書館大閲覧室（国立）

一橋生を育てた図書館は、 一橋生が育てた図書館でもある

長引く経済不況と、それにつづく十五年戦争は、書籍の購入もままならない学生や教官をますます図書館に引きつけることとなりますが、図書館の図書購入費も次第に逼迫し、文部省からはこれに追い打ちをかけるように外国図書の購入は最小限にとどめよという通達まで出されます。これに対して時の図書館委員会は、如水会や卒業生に寄付金を募るとともに、海外在住の卒業生には海外図書の寄贈を依頼するなど、図書購入費の不足を補う活動をくりひろげ、中西（有一）文庫、佐野（善作）文庫、石原（宗助）文庫、上田（貞次郎）文庫など、本学図書館を特色づける多くの特殊文庫の寄贈を受けています。

また、神戸商大と大阪商大、それに本学で「三商大図書

館協議会」を結成し、図書と資料の相互貸借に道を開いたりもしています。

学生たちは学生たちで、夏季休暇を返上して、図書館に収蔵された邦文雑誌の論文索引カードの作成にあたるなど、図書館の運営に力を貸しています。当時、雑誌に掲載された論文の目録は昭和5年までのものしかなかったため、このカードはずいぶん重宝されたようです。

図書館は、図書を単に収蔵していればいいという施設ではないのです。収蔵している書籍や資料のすべてが、定まった分類表に基づいて分類整理され、どんな内容の本が書架のどこに収蔵されているかが分かなければ、まさに宝のもちぐされになってしまう。ですから戦時体制下であっても、寄贈を受けた文庫の目録は、受け入れ後ほとんど間髪を入れずに作成されているんですね。図書館員のこうした働きにはほんとうに頭が下がります。

そうこうするうちに国立キャンパスの上空にも毎日のように敵機が来襲するようになり、昭和19年の暮れから20年にかけて、貴重書約5万冊の疎開が行われたのですが、時局も差し迫った中ですみやかに貴重書の選別ができたのも、それに先立って図書目録が整理されていたからだと思いますね。

また、特筆すべきは、この疎開図書の中には、メンガー文庫やギールケ文庫、左右田文庫などと並んで、全卒業生の学位論文も含まれていたということです。本学図書館は今も全卒業生の学位論文を収蔵しつづけていますが、これを世界的な宝典と同等の貴重書と見なしているというところにこそ、本学図書館の立脚点があるといっていいいでしょう。

本学図書館は、本学に学ぶ学生たちを育て、その学生たちによって育てられてきた図書館なんです。ですから、学生たちは卒業後も図書館を本学のシンボルと考え、その図書館の拡充に心を寄せてくれるんだろうと思います。本学図書館の現在の蔵書冊数は174万冊にのぼりますが、その1冊1冊に、卒業生たちの思いが宿っているのです。（談）



商法講習所時代 (1875年～1883年)

- 1875年 森有礼、銀座尾張町に商法講習所を開設する
- 1876年 木挽町の新校舎に移転
- 1879年 校則中に教科書貸与取扱のことが規定される

東京商業学校時代 (1884年～1886年)

- 1884年 農商務省所轄となり、東京商業学校と改称する
- 1885年 文部省所轄に移る
東京外国語学校（現・東京外国語大学）と合併
図書室（書籍庫17.5坪、閲覧所15.7坪）が初めて設けられ、図書掛3名を置く

高等商業学校時代 (1887年～1901年)

- 1887年 高等商業学校と改称
- 1890年 本校校舎改築、図書館から着工
- 1894年 図書館（67.22坪）竣工
教授からも図書掛兼任を置くこととなる
- 1897年 図書館主幹の制度を設け、図書掛兼任だった奈佐忠行教授が初代主幹となる
- 1899年 東京外国語学校と分離、旧外国語学校蔵書の大部分を移管

東京高等商業学校時代 (1902年～1919年)

- 1902年 東京高等商業学校と改称
図書館の運営強化を図る（3名の教授が図書委員に就任）
- 1905年 学内外から図書館の充実の声が高まる
- 1906年 図書購入費としての『奨学資金』が半田庸太郎氏より寄付される
- 1908年 閲覧所（木造2階建137.221坪）竣工、100名の収容が可能になる
帝大内に経済、法学部の新設に伴い専攻部の廃止案がでて、反対運動が勃発（申西事件）
- 1912年 三浦新七教授、図書館主幹に就任
- 1913年 卒業生が母校擁護助成のための組織を作る（如水会クラブ発足）
学内も予科、本科、専攻部と改組し大学組織の充実を図る
- 1915年 レキシス文庫を入手
- 1917年 御大典記念図書館竣工（書籍鉄筋4階建155坪、事務室、閲覧室、木骨煉瓦張197.7坪）

東京商科大学時代 (1920年～1943年)

- 1920年 東京商科大学となる
- 1921年 元台湾総督府立図書館長太田為三郎、図書館幹事代理に就任
元台湾総督府立図書館司書小長谷恵吉、図書目録編纂事務嘱託に就任
ギールケ文庫を入手
- 1922年 カール・メンガー文庫を入手
- 1923年 関東大震災 図書館は一部の破壊のみで蔵書は消失を免れる
- 1924年 石神井予科仮校舎群中に図書館予科分館を設ける
- 1926年 勅札により官制上本学に附属図書館が設置される
- 1930年 北多摩郡谷保村（現・国立市）の新キャンパスに附属図書館竣工（鉄筋建坪728坪、延1844坪）
- 1930年～1943年 国内外よりコレクションを収集、蔵書の充実を図る
- 1931年 予科および専門部廃止案が大蔵省の行政財政整理委員会にあり、籠城事件が勃発する
- 1936年 北多摩郡小平村（現・小平市）に予科新校舎落成、予科分館（後・小平分館）も竣工する
- 1944年 2月 戦時緊急の要に応じ専門部校舎、予科校舎を軍に貸与

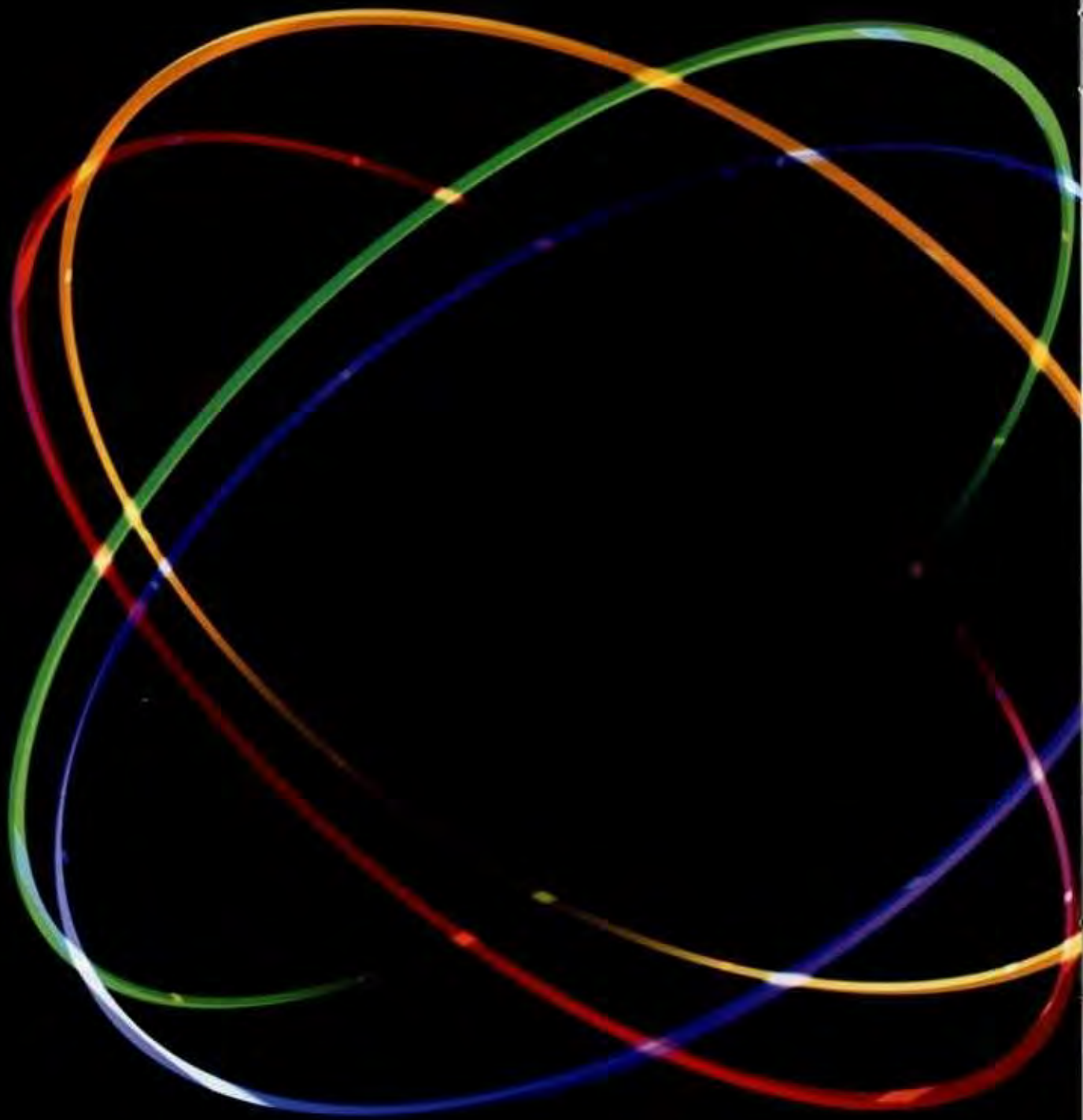
東京産業大学時代 (1944年～1946年)

- 1944年 9月 東京産業大学と改称
- 1945年 3～6月 貴重書を長野県伊那町および辰野町へ疎開
7月 米軍機が図書館建物を銃撃
8月 第2期疎開図書8箱の箱詰中に終戦を迎える
11月 伊那町から疎開図書が戻る
- 1946年 2月 辰野町から疎開図書が戻る

東京商科大学・一橋大学 (1947年～)

- 1947年 東京商科大学に復する
- 1949年 国立学校設置法が公布され、一橋大学が発足
図書館規則の一部を改正。同施行細則改正
大学設置法令公布により図書館の事務組織が確立され、事務長および本館に4係、総務係（のち管理受入係）、洋書係、和漢書係、閲覧係、および分館に図書係が置かれる
図書委員会を復活する
- 1955年 故ハーバード大学教授ジョセフ・シュンペーター氏の遺蔵書寄贈される
- 1964年 文部省訓令をもって本学に制度上小平分館を置くことが定められる
第2書庫（1,035m²）竣工
- 1969年 小平分館（1,580m²）が新築竣工、開館
- 1976年 一橋大学附属図書館史刊行
- 1977年 図書館貴重書書庫（現・社会科学古典資料センター棟、1,110m²）竣工
- 1978年 部課長制を敷き、整理課、閲覧課の2課を置く
社会科学古典資料センター発足
- 1979年 小平分館新書庫（550m²）竣工
一橋大学附属図書館報「鐘」創刊
- 1980年 図書館新館（現・雑誌棟低層部、870m²）竣工
- 1981年 情報処理センター汎用機システムによる新館閲覧業務の電算処理を開始
- 1983年 第3書庫（885m²）竣工
- 1985年 社会科学系外国雑誌センター発足
情報処理センター汎用機システムによる雑誌業務の電算処理を開始
- 1988年 整理課を情報管理課に、閲覧課を情報サービス課に改称
- 1991年 図書館業務電算システム「HERMES」導入。ほぼ全業務を電算化
附属図書館内に特定EC資料センターを設置
- 1994年 EU（欧州連合）設立にともない、EC資料センターをEU資料センターに改称
- 1995年 如水会の援助により、目録所在情報検索システム「JOINT」を導入し、ネットワーク検索サービスを開始
図書館新館増改築（現・雑誌棟、4,246m²）竣工
図書館公式webホームページを開設
- 1997年 webによるネットワーク目録所在情報検索サービスを開始
小平分館を廃止し、小平図書収蔵庫を設置
東学習図書室開室
- 1999年 HERMESシステムによるイノベーション研究センター資料室目録業務の電算化を開始
- 2000年 図書館本館増改築（6,693m²）竣工
HERMESシステムによる国際企業戦略科図書室の業務電算化を開始
- 2001年 一橋デジタルアーカイヴス（HDA）システムを導入
公開展示室を開設
- 2002年 小平収蔵庫残置資料の本館移転完了
- 2004年 法人化にともない、図書館事務部を学術・図書部に改組。学術情報課、研究支援課、情報推進課の3課を置く

EU  Institute in Japan





わが国における EU学術研究、情報発信、普及活動の拠点 EUIJが本格的に発足

各界の期待を集めてEUIJ正式発足

「EUインスティテュート・イン・ジャパン (EUIJ)」が、一橋大学マーキュリータワーに拠点を置いて発足したのは、2004年4月1日のことである。EUIJは、日本におけるEUの学術研究および普及活動の拠点を構築すべく、欧州委員会が募集した入札プロジェクト。2004年の4月から、半年の準備期間を含めた3年半のプロジェクトで、欧州委員会から100万ユーロの事業資金が拠出される。一橋大学、国際基督教大学、東京外国語大学、津田塾大学の4大学が結成したコンソーシアムの提案が、採択されての発足である。

6月22日(火)、欧州委員会のロマーノ・プロディ委員長臨席のもと、東京・パレスホテルでこのEUIJの開設記念レセプションが開催された。式典は、清水啓典一橋大学副学長の司会により開会。石弘光学長、プロディ委員長の挨拶に続いて、奥田碩日本経団連会長、阿部正俊外務副大臣、小野晋也文部科学副大臣等(当時)の祝辞が述べられた。

式典の挨拶でプロディ委員長は、EUIJ設立の労をねぎらい、EUIJが今後の日本とEUとの関係強化に果たす役割の重要性を強調した。その趣旨は――

「日本とEUとの相互認識の強化ばかりでなく、知識を深めることが必要だ。私たちはEUやその政策等に焦点を絞った教育、研究、啓蒙活動を促進したいと考えている。EUIJがマスコミや経済界、オピニオンリーダー、政策決定者向けの、第一級の情報や知識の源泉となることを願っている」

式典終了後に、プロディ委員長は4大学の学生約30名と昼食をとりながら歓談した。これは、ボローニャ大学で長らく教鞭をとったことのある委員長の強い要望から実現したもの。杉浦保友一橋大学教授の司会により、学生から投げかけられる、EUの今後についての様々な質問に、予定時間を超えて丁寧に答えていた。

こうして、EUIJが本格的にスタートしたのである。



欧州委員会委員長ロマーノ・プロディ氏



EUIJの活動の目的

この5月に新規加盟国を加えて25の加盟国からなる世界最大の単一市場EU。日本の学生や一般市民が欧州統合の重要性を知り、日本-EU間のパートナーシップを強めるのにはいい機会といえる。そのようななかで、EUIJに期待される活動目的は次の通り。

(1) EUに関する教育・学術研究拠点となる

大学学部生向けにEU関連科目の新設、欧州からの教授の招聘、奨学金提供、欧州の大学との共同研究や学術交流の推進などの活動を推進。EU研究の拡大・深化を目的とした中核研究拠点を構築する。EUをテーマにした4大学コンソーシアムのカリキュラム（EUコース）の開発により、多くの学生が正規の科目の中でEUに親しむことになる。なお、必要単位を修得した学生には、EUIJからEU研究の修了証書を授与することも計画している。

(2) EU情報の発信拠点となる

ホームページの立ち上げ、ニュースレター、年次報告の発行、EUライブラリーの設置、EUIJメンバーズクラブ、EU関係機関との緊密な関係樹立などによって、有益なEU情報を発信する。

(3) EUの普及活動の推進

学生や一般市民のEU理解を深めるため、放送大学大学院でのEU講座の開講（2006年から4年間）、EU関連講演会の開催、国際シンポジウムやワークショップの開催、企業向けEUビジネスセミナーの開催、公開講座の開催……などの普及活動を行い、人と人とのつながりをも強化していく。



4大学を代表し挨拶する一橋大学石学長



レセプションにはEU加盟各国大使および各界の要人も参加した



一橋大学

役割分担

- 幹事校としてコンソーシアム全体のとりまとめ
- 新EUコース・単位互換・EU単位取得証明委員会リーダー
- 普及活動委員会リーダー
- 一定分野の共同研究担当

高まるEU研究の求心力



一橋大学大学院
法学研究科教授
杉浦保友

すでにアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドでは、EUIJと同じコンセプトのEU Centreが設立されています。欧州委員会は、豪州、ニュージーランドの複数の大学コンソーシアムによるEU Centreがうまくいっているとしてこれをモデルにして、EUIJを結成することを求めました。なお、マスコミなどではなく大学を拠点とするのは、これまで不足していた日本でのEU研究・教育拠点を設立したかったこと、情報が集まりやすいということと、将来のビジネス、ポリティカルリーダーを育成するなど、日本でEU理解を深めるには、大学が一番適切と考えたからです。

一橋大学には、勿論、経済、経営、法、政治、社会問題の個々の分野で、EU研究が進んでおりますが、更に、ビジネス現場やビジネスリーダーに近いという特徴があり、また、ヨーロッパに提携大学が数多くあります。ICUは外交、国際政治、科学技術、EU法などの分野でEU研究が進んでいて、ヨーロッパに人脈も多い。そして、東京外国語大学は特殊言語を中心に地域主義の研究を行っていますし、津田塾大学は社会問題や環

境問題の研究を熱心にやっています。こうした組み合わせの妙と、ビジネスセミナーや、学生への欧州インターンシップへのスカラシップの供与、放送大学の活用など提案内容のユニークさが欧州委員会に評価されたのではないかと考えています。

違った切り口を持った4大学が組むことによって、新しいものが生まれてきます。ここではEUについては日本で最も新しいことが学べるのです。すでに、欧州委員会からさまざまなインプットがあり、来日する学者や作家などの講演会やシンポジウム、欧州から来日する学生などとの交流計画を検討しています。

一橋大学は21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」にも採択されました。これは、EUIJ活動とも密接に関連しています。

これらにより、一橋大学におけるヨーロッパ研究の求心力がさらに高まり、日本でのEU研究・教育の拠点として、またEU普及活動の中心として、日本の他の大学にはない特徴を出していければ良いと思っています。(談)

学生がメリットを享受できる仕組みづくり



一橋大学大学院
商学研究科教授
小川英治

一橋大学では、これまでEU研究・教育が組織化されていませんでした。法学部や社会学部にはEU関連科目がりましたが、商学部と経済学部にはEU研究者はいましたが、授業科目としてはなかったのです。そこで、『EUにおける企業と市場』『EU経済とその改革』『EU法』『国際社会学1』など、各学部がEU関連科目を提供することを計画しています。さらに、4学部の8人の先生によるオムニバス形式の『EU入門』を開講するのも一つの特徴です。もちろん、これらの講座は4大学の学生に単位互換科目として公開する予定です。一定の単位を取得した学生にはEU研究の修了証書を授与することも考えています。

なお、EU機関やEU企業でのインターンシップや奨学金が用意されているのもメリット。EUコースを修了することは、EU企業への就職ばかりでなく、国内企業への就職でも優位性を持つことができるでしょう。

EUでは、政治や経済で実験的な試みが行われています。EUを学ぶことは、アジアにおける自分たちのポジションを考えることにもつながります。たとえば、拡大EUに加盟するために新加盟国は自国を変えていきました。その過程を研究することは、東アジア共同体を模索する際に役立ちます。EU研究の成果を、東アジア研究にまで及ぼすことができるのです。(談)



ロマーノ・プロディ委員長の希望により、4大学の学生たちとの歓談の場が設けられた



国際基督教大学

役割分担

- ミッション・学術交流・共同研究委員会リーダー
- 一定分野の共同研究担当

EUの動きと学問との整合性を持たせる



国際基督教大学
社会科学研究所所長・
大学院行政学研究科教授
植田隆子氏

加盟国25カ国、世界のGNPの4割を占めるEU。世界的な影響力はますます増大し、アメリカとEUで多くの国際的な物事が決まってしまう時代です。とくに日本では遅れているEU研究を深めていくのが急務といえます。教育面でも各国の言語、文学、歴史など個別の講座はあっても、EUをひとつの政治経済文化圏として捉えた総合的な教育は日本ではほとんど行われてきませんでした。EUIJの任務は大きいのです。

ICUでは、もともとEUについての専門的な授業が4大学の中では最も多く開講されています。EUの対外関係、欧州安保を研究している私のほか、前EU代表部大使の木村崇之客員教授と、EU法、国際法などの分野で世界的に著名な大家のThomas J. Schoenbaum教授（行政学研究科）が、すでにEUに関する授業を行っています。

EUIJでは専門家を欧州から招聘して新講座を開講します。ICUは自然科学分野を専門課程で持つ大学として、エアバス・インダストリー社やEU版GPSのガリレオ、宇宙政策などでも注目されるEUの科学技術政策に関する講座を日本物理学会会

長の北原和夫教授（理学研究科）が組織し、来年9月—11月（約10週間）に開講します。来年8月末—9月上旬には集中講義で英国の外交官、欧州官僚の経験があり、EU情勢に関する分析で欧米の学界やマスコミも注目するフレーザー・カメロン博士を招いて「EUの対外関係」（ゼミ形式）を開講予定です。外交官や国際公務員志望の学生さんにも役立つでしょう。4大学の学生さんは共通講座を是非、活用してほしいですね。

留学生との交流目的の行事である本年12月のICU「国際週間」では、10日に4大学でのEU関係の討論会企画が学生から提案され、準備に入っています。2005年1月10日のEUIJの初回国際会議（ICU、一般公開）では、「EUをどう教えるか」「EUの新しいトピックス」などEU本体の動きを、第一線の専門家たちと検討する予定です。視野を広げ、EUをきちんと学ばないと国際社会の動きから遅れるという危機感があります。国際的に活躍するためにはEUに関する知識は、もはや「MUST」なのです。そのため、EUIJの研究、教育、情報普及活動は日本で大きな期待を集めています。（談）

東京外国語大学

役割分担

- スカラシップ委員会リーダー
- 地域・文化の共同研究担当

EUの多様な価値観を学び、協力しあうパートナーに



東京外国語大学
教授（国際法）
西立野 園子氏

東京外国語大学は、26専攻50言語に分かれています。地域研究、国際関係論、国際法、経済などの勉強とこれらをつなげることによって、広く国際社会で活躍する人材を育てています。その意味からも本学はEUを学び、その成果を世界に発信する上で格好の場だと思います。

すでに昨年度からEUIJをにらんで、『ヨーロッパ経済論』『ヨーロッパ国際関係論』など、EUにフォーカスしたカリキュラムをスタートしていますが、1年目の計画としては、『ヨーロッパというかたち』というタイトルの公開講座を5回シリーズで展開します。また、単位互換科目としては、『EU諸国の比較政治』、チェコ語、ポーランド語、スロベニア語、スロバキア語など少数言語の提供などを予定しています。中でもEU加盟諸国から教員を招聘して行う新設科目の『EU法』はEUIJの目玉となると考えています。EU法の専門家は日本でもまだ数えるほどしかいません。その方にはコンソーシアムとEUとの間のコンタクトパーソンの役割も担ってもらうことも期待しています。できるだけ数年ごとに違う国からきてもらえればと考えていますが、そうすればEUのいろいろな地域の勉強にも資すると思います。

EUは多言語主義をとっており、地域言語文化を尊重、擁護

しています。放送大学ではヨーロッパの言語政策に関する講義にもかかわることを考えていますが、これなどは東京外国語大学ならではの貢献の仕方といえるでしょう。また、2006年のサマープログラムでは、マルチリンガリズムの専門家2名をEUから招聘する予定です。

これまでの地域研究は、国ごとに完結する形でしたが、これからはEUというコンテキストの中でそれぞれの国を改めて見直す必要があります。またマイナーな言語も含めてそれぞれの言葉、文化を学ぶということは、今後のグローバル化の中で重要性を増す市民社会レベルでの交流においても改めて価値を発揮することでしょう。またEUの外交、政策を学ぶということは、とくにアメリカに気をとられていた日本が、多様な価値観に触れることによって日本としての軸の取り方を主体的に選びとる方向に向かえばいいと個人的には思っています。

スカラシップ・インターンシップ担当の幹事校としては、EU機関でインターンシップを経験することはヨーロッパでもステータスだということ。まだ一般には知られていないみたいですが、日本でもEU法などEU研究に強い人材に対するニーズが非常に高いことを強調したいですね。（談）



役割分担

- 図書委員会リーダー
- 一定分野の共同研究担当

「地域とEU」で先行する強みを活かす



津田塾大学
学芸学部
国際関係学科助教授
大島美穂氏

津田塾大学は規模が小さいだけに、各学科間の垣根が低く小回りが利きます。たとえば、EUと外部地域との関係。アフリカやトルコなどの研究者も交えて講座をつくり上げようとしています。また、情報数理科学科を巻き込んでいこうとしているのも、小回りが利くメリットです。さらに、同時通訳や広報のノウハウがあるOG会の津田塾会が全面的に支援してくれるのもメリット。公開講座やEUアピール活動などの情報発信に大いに役に立てよう努力したいと思います。

『EU法』『EUの外交』などの研究の軸になるような研究は、ほかの3大学に任せて、津田塾大学では今年度は『地域から見たEU』『EUと環境問題』『EU環境法』などを単位互換講座として取り上げます。学生は4大学でさまざまなEU講座を受講できますから、津田塾大学の得意分野である「地域とEU」関係を中心に上げていこうとしているのです。なお、唯一の女性大学としては、ジェンダーの視点も重要になるでしょう。

国際関係学科のみならず英文学科にもその研究者は多いので、協力をさせていただくことになります。EUを学ぶということは、最終的には「日本はどうか」ということを考えること。

日本ではヨーロッパ各国の個別な研究はあっても、EU研究者の層は薄く、まだまだ未開拓な分野というのが現状です。EUに統合されたことで各国に何が生まれるか。学生にとっては、自分の中で自分なりのプロジェクトを設計してアプローチする姿勢を持つことが重要になります。それがトータルな視点を持つことにつながるのです。

津田塾大学はEUIJの図書委員会の幹事校でもあります。4大学でEU関連図書を選書して購入するほか、図書館の相互利用まで推し進めようとしているところです。多摩にある4大学は、自転車を通える範囲。EUIJは、研究よりも教育に力点をおいた教育色の強いプロジェクトですから、学生にとっては大きな魅力があるといえます。(談)

左から、鈴木国際基督教大学長、志村津田塾大学長、池端東京外国語大学長、石一橋大学長



2005年4月開校の国際・公共政策大学院 ～その狙いと目指すもの～

経営学大学院 (Business School)、法科大学院 (Law School) に続いて、政策大学院 (Policy School) が、平成17年に向けて開校準備を進めている。正式名称は国際・公共政策大学院。

その特徴は、法学研究科と経済学研究科が連携して、一橋大学ならではのアセットをフルに活用した政策大学院をつくり出そうとしているところにある。以下にその詳細をまとめた。



政策大学院創設は時代の必然

経済、文化のグローバル化、ボーダレス化が進んでいる。経済や社会の国際化は当然ながら政策面にも影響を及ぼす。一国の視点のみから見た政策では通用しない、それが今の時代ではないだろうか。つまり、法律や経済学、国際関係などの幅広い視点と高度な専門性を持ったプロの育成が急務になってきたのである。

教育現場に目を転じると、大学院の復権が進んでいる。グローバル化がもたらすメガコンペティションにより、職業に必要とされる専門性が増大しているからである。それは企業ばかりでなく国際組織、国や自治体、NGO/NPOにも同様に及んでいる。国際交渉の場でも、交渉相手である欧米やアジアのスタッフは修士や博士であるケースが大半である。当然、その流れは官僚はじめ社会全般に及んでいく。

高い専門性を持って組織の中で個人の力量が発揮できる人材——自ら課題を発見し、その解決を図ることができる人材の育成が、とりわけ公共政策分野で強く求められているのである。

一橋大のアセットを結集

政策大学院がめざしているのは、大きく分けて次の4つになる。

1. 先端研究の基礎に立つ高度専門教育
2. 横断的分析による複合的視点の育成
3. 政策分析における多角性と実践性の重視
4. アジア・太平洋における拠点の構築と世界への発信力の養成

一橋大学がこれまで蓄積してきたアセットが、政策大学院のさまざまな場面で有機的に活かされている。

たとえば、教授と学生との関係が緊密な伝統の少人数教育。政策大学院の定員は毎年55名。新卒者、社会人、留学生を交えた少人数教育こそ真の政策のプロを育成するのに不可欠な環境なのである。

法学、経済学の融合も強みの1つ。政策大学院では法学、国際関係、経済学などの枠組みを基に多面的にアプローチする。カリキュラムには、異なる学問領域に属する教員が共同して1つの科目を担当する「横断型科目」も用意されている。

一橋大学が自他共に認めている民間との強いネットワークも政策研究の深化を後押しする。政府機関はもちろん民間機関との交流・

経済学研究科長 経済学部長

田近栄治 Eiji Tajika

「修士後のキャリアを意識して、出口から考えて学ぶことを
お勧めしたいですね。より高度のプロをめざして、
博士後期課程への進学も選択肢の一つです」



法学研究科長 法学部長

山内進 Susumu Yamauchi

「実践力が身につく新しい仕組みが特徴。
官庁や独立行政法人、国際公務員、総合研究所、
NGO/NPOなどに、政策のプロとして送り出します」



連携を通じて政策研究を進めていくのである。なお、教員側も実務家や財務省・日銀出身者など、実務に強い人材を確保。実践的な研究を進めていく。

これからの日本に、アジア・太平洋地域との連携が重要であるのはいまでもない。一橋大学ではすでに、グローバル・ガバナンス・プログラム及びアジア公共政策プログラムの核となる2つのプログラムにより、アジア・太平洋地域の研究者や学生と交流を進め、研究拠点として機能させてきた。これらのプログラムは政策大学院のなかに統合され、教育・研究拠点としての存在感をさらに高めていく。

2コース・4プログラムで構成

政策大学院は、2コース、4プログラムで構成されている。法学系の「国際・行政」と経済学系の「公共経済」の2コース。さらに各コースは「公共法政」「グローバル・ガバナンス」、そして「公共経済」「アジア公共政策」の各2プログラムに分かれている。そのなかで「アジア公共政策」はアジアからの留学生を中心とした独立性の高いプログラムで、授業はすべて英語で行われる。他のプログラムには、経験を積んだ社会人なら最短では1年間で修士号を取得できる1年制課程が設けられている。

カリキュラムは、テクニカル・トレーニングとプロフェッショナル・トレーニングで構成されている。

テクニカル・トレーニングは、基礎科目、コア科目、応用科目、事例研究の4つに分類される。基礎科目で政策の基本を確実に身につけてから、コア科目で政策に関する基本的な問題を学び、応用科目で広く深く研究を進めていく。そのうえで事例研究により、実際の事例を素材として、それまで学んだ理論や分析手法をフル活用して政策の分析・評価ができる能力を身につける。

これらのテクニカル・トレーニングに加えて、「インターンシップ」「ワークショップ」「コンサルティングプロジェクト」から成るプロフェッショナル・トレーニングが行われる。社会で実際に活躍

する際に必要なさまざまなスキル、広い意味でのコミュニケーション能力（深く聴く力と伝える力）を身につけるのが目標になる。

この2つのトレーニングをバランスよく履修することで、専門性の高い見識と技能とともに、高いコミュニケーション能力を身につけることができるようになるのである。

なお、さまざまな政策に対して多面的にアプローチできるのが、カリキュラムの特色。学生は所属するコースとプログラムを選択するが、カリキュラムは法学、国際関係、経済学などの専攻を横断して、さまざまなアプローチを学ぶことが奨励される。それぞれのアプローチのよさを取り入れて、多面的かつ深く政策を分析できる能力を育成しようという考えからである。

世界に通用する政策のプロ育成

政策大学院の育成しようとしている人材を整理すると――

1. 国際・公共政策の専門家として、法律学、国際関係、経済学のいずれかの分析方法を習得している
2. 問題の複雑さに対応できるよう隣接分野の分析方法も理解している
3. 国内外の政府活動や地域社会の政策現場で実践的政策分析と提案を行い、優れた説得力により、提案を政策として実行できる能力を持つ
4. 優れた政策を世界に向けて発信できる

こうした適応力のある政策のプロを育成するために、教員の密接な指導と監督のもと、政策の基礎科目の徹底的な習得や具体的な政策の掘り下げた分析と討論を行うのが特徴。さらに学生は、自分自身で行政や総合研究所を巻き込んだプロジェクトを企画運営し、国際セミナーを支えていく。



政策大学院に関する詳細情報は <http://www.hit-u.ac.jp/ipp>

プログラムと定員

コース		国際・行政		公共経済	
プログラム		公共法政	グローバル・ガバナンス	公共経済	アジア公共経済
課程	対象者	定員			
2年課程	新卒者・社会人・留学生	25名		15名	
1年課程	社会人	15名			

(一橋大学国際・公共政策大学院は2004年10月時点で、設置認可申請中です)

言語社会研究科・留学生センター・国立国語研究所の 三者連携による新講座「日本語教育学位取得プログラム」がスタート ～3つの角度からのアプローチで、最高水準の日本語教員養成体制・日本語研究体制を確立する～



日本語に対する多様な問題関心に対応する

言語社会研究科研究科長 佐野泰雄 Yasuo Sano



日本に関する深い理解と鮮度の高い情報を携えて国際的に活躍する日本語教育者を養成すること。これが、2005年度新規設置の連携講座「日本語教育学位取得プログラム」の目的です。

言語と社会の複合的な関係を主な学問領域とする本研究科の学生、特に留学生のなかには、日本語そのものを学びたい、あるいは課程修了後、日本語教員としてのキャリアを歩みたいという希望を持っている者がいました。ところが、これまではその受け皿となる体制が整っていませんでした。

そこで、一橋大学留学生センター、ならびに国立国語研究所と連携して新講座を設置、上記のプログラムを実施運営することにしました。留学生センターには、日本語教育学一般に関する理論的実践的研究教育はもとより、社会科学の総合大学ならではの専門日本語教育の蓄積があり、それを連携講座に提供していただきます。

国内最大の日本語研究機関である国立国語研究所は、話し言葉の研究、対照言語研究（たとえば日中）などの領域で先端的な業績を挙げています。学生諸君はこの機関所属の先生を介して、最新の日本語研究に接することができるでしょう。

もちろん日本語の総合的な研究には、日本社会や日本文化への目配りが不可欠です。新連携講座が設置される言語社会研究科には、社会言語学、日本文化論、民俗学の成果が蓄積されており、それら

を学ぶことで、自分の研究に社会的、文化的な奥行きと広がりを与えることができます。

このプログラムの修士課程修了後のキャリアとしては、日本語教員のポストに就く、あるいは博士課程に進学し研究者となるといったオプションのほかに、日系企業や合併企業に就職したり（留学生）、官公庁や地域自治体で国際交流業務に携わることも十分考えられます。こうした可能性をサポートするため、インターンシップをカリキュラムに導入するほか、地域との連携によるボランティアなど実践的な教育の場を用意します。これらもこの講座の大きな魅力になることでしょう。

2005年の春には、国立国語研究所が立川に移転してきます。研究の相互補完という内的要因に加えて、地縁という外的要因も強い動機となり、一気に新講座開設という運びになりました。ありがたいことです。

日本語教員にも学位が必須の資格として求められる時代に既に入っています。現職の日本語の先生たちにも、本連携講座を学位取得のためのリカレントプログラムとして使っていただけると確信しています。

「日本の関連教育機関のなかでは、最高のものになるだろう」という声が、本プログラムの企画段階でよく聞かれましたが、今後は、自他共にそう認められるよう成果を挙げていかなければなりません。（談）

留学生センター

留学生センターは、日本語教育部と留学生相談部門からなります。全留学生対象の日本語授業と日本事情教育、ならびに国費研究留学生を主な対象とする6カ月集中日本語予備教育などを実施する一方、留学生の心理的な悩みや生活、就学、就職等の相談に応じています。日本語教育学位取得プログラムでは、社会科学の専門日本語研究・教育の実績を基礎に、日本語教育の観点から教育、研究を担当します。

日本語の内と外をしっかりと学ぶ

言語社会研究科教授 イ・ヨンスク Yeounsuk Lee



日本語教育という面では、とりわけ漢字圏からの留学生には、背景となる歴史的問題や社会、文化を無視できません。日本語を学ぶことで、日本語と母語との関係をふりかえる機会にもなると思います。

日本とアジア諸国の関係を考える際にも、日本語学習が深い次元での理解に役立つのではないかと思います。たとえば、韓国語の近代化には日本語の影響を無視できません。ほとんどの近代的な概念を表す漢語は日本から輸入されました。しかも日本語と韓国語は言

語構造がよく似ているところがあって、影響が直接入り込みやすかった面もあります。日本語を内側と外側の両面から眺めることで、日本語研究の厚みも増してくると思います。

これまで、言語と民族は一対一で対応すると思われてきました。しかし現在は人が国境を越えて動いている時代です。日本人だから日本語を話すのでも、日本語を話すから日本人だというわけでもありません。その前提で、日本語教育も幅広くやっていく必要があります。言語社会研究科、留学生センター、国語研究所の三者が一体となることによって、理想的な日本語教育機関ができると思います。(談)

専門日本語教育が強み

一橋大学留学生センター長 教授 五味政信 Masanobu Gomi



一橋大学の場合、留学生のほぼ6割が漢字圏からの留学生です。中国からの留学生が多く、それだけに歴史など日本語を取り巻く種々の事柄を知っていることは大切です。私は中国東北部で日本語教育に携わったことがあります。街中で戦争の傷跡を目にしました。日本語教師は海外で仕事することもあり、その国の戦争世代の市民と接することもあります。日本語教育はどのように行われてきたのか、日本語教育史を学ぶことも、実践的な日本語教授法を学ぶことと同様に重要です。この新講

座ではそれらを学ぶ環境が整っています。

留学生は学ぶべき専門を持っています。その専門分野に応じた日本語教育が必要ですが、一橋大の留学生センターはその「専門日本語教育」の蓄積を有しています。専門日本語教育の教材『学術日本語シリーズ』はすでに9巻発行されています。

最先端の日本語研究を行う国語研究所、日本語の内と外を研究する本センターと言語社会研究科、この三者が連携することによって、三者のそれぞれが大きく発展することも期待しています。(談)

様々な背景の人が集う「核」としての講座

国立国語研究所日本語教育部門 第一領域長 井上 優 Masaru Inoue



国立国語研究所は「研究開発部門」「日本語教育部門」「情報資料部門」の3部門からなり、日本語及び日本語教育に関する研究を行っています。最近では、世界最高水準の自発音声データベースである「日本語話し言葉コーパス」や、19世紀末から20世紀初めの総合雑誌『太陽』をもとにした「太陽コーパス」などを作成しています。

日本語教育は、「日本語」を中心として様々な専門領域の人が集う場です。様々な背景を持った人が集まり、それぞれの研究を有

機的に関連づけることで、日本語教育の研究は厚みを増していきます。この連携講座は、そのような交流の核となることが期待されます。

言語研究者は、「言語」というものを通して、人間や人間をとりまく世界について考えています。また、言語、とりわけ自分自身の母語は、物事を分析的・実証的に考えるトレーニングには格好の材料です。人は案外自分の母語や文化について考えたことがないものです。留学生にとっては、日本語について学ぶことは、同時に自分の母語や文化を見つめなおすよい機会となるはずです。(談)

国立国語研究所

国立国語研究所は、日本語及び国民の言語生活と外国人に対する日本語教育に関する調査・研究、ならびにこれに基づく資料の作成と情報の提供を行う機関です。言語研究の分野では、コンピュータを用いた計量言語学研究、大規模調査にもとづく方言研究・社会言語学研究などで知られています。日本語教育学位取得プログラムでは、言語研究の観点から、実証的なデータと分析手法の蓄積を存分に活用した教育、研究を担当します。

(一橋大学大学院言語社会研究科における新講座「日本語教育学位取得プログラム」は2004年10月時点で設置認可申請中です)



研究室訪問

各国各様の経営事情、社会環境を理解することが
コーポレイトガバナンスを研究する上で、
重要なアプローチとなります

日本のメインバンク、 韓国の財閥、タイの同族 その国の必然から生まれたかたちがある

日本の大手銀行の大株主は、誰だかご存じでしょうか？一般的に知られていることですが、大手銀行の大株主は大手保険会社、中小の銀行の大株主は大手銀行です。これをデータベースで検証してみると、より明確に実態が浮き彫りになってくるのです。どうしてこういう構図が生まれたのか、そのことは日本の銀行の「コーポレイトガバナンス」にどのような影響を与えているのか、あるいはいないのか、過去の経緯から遡ってそれを明らかにしていくことが、私がいま取り組んでいる研究テーマの一つです。

銀行が経済や産業に大きな影響力をもっているのは、どの国でも同じですが、銀行のあり方そのものはそれぞれの国の企業の経営形態によって異なります。例えば、日本には「メインバンク」という形態があり、韓国では財閥、タイでは同



経済研究所附属経済制度研究センター 助教授

ユパナ・ウィワッタナカンタン

Yupana Wiwattanakantang

1965年、タイ・バンコク生まれ。86年、バンコク・タマサート大学経済学部卒、
91年3月、同大学院経済学研究科修士課程修了後、Siam Commercial Bank入行。
91年10月、国費留学生として来日。筑波大学留学生日本語センターを経て、
92年一橋大学大学院経済学研究科研究生入学。99年一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。
経済研究所附属経済制度研究センター客員助教授を経て、2003年6月から現職。タイでは女性の研究者も多く、
母校タマサート大学では教員の6割が女性という。ビジネス界でも女性は多数活躍している。

族による企業経営が中心となっています。財閥や同族経営というと、一般的には好ましくないというイメージだと思います。でも、韓国の経済危機からの脱却と、財閥は無関係ではありませんでしたし、タイでは金融関連の法が未整備であり司法当局にも依然ワイロが横行していますので、そのため、信頼できる人間に経営を託すためには同族経営にならざるを得ないのです。また、日本でもかつての護送船団方式は崩壊し、企業グループを超えた統合が行われていますし、企業への融資や再建支援にしても「潰すべきものを潰すのはいいこと」という方向へ変化してきています。このように、銀行のあり方は時代や社会の環境変化、法や国民性など多様な要素が複雑に絡み合っているのです。

こうした各国各様の構造や事情、社会環境などを抜きにして、アメリカ流の「コーポレートガバナンス」を物差しにして是非を論じても意味がありません。アメリカの「コーポレートガバナンス」は、「企業は株主のもの」という考え方が社会的コンセンサスを得、資本市場からの資金調達が当たり前であるアメリカで生まれたものだからです。もちろん、「コーポレートガ

バナンス」という考え方は重要なものですし、経済の健全な発展のためには国としてキチンとした施策を打ち、制度化していく必要があります。経済制度研究センターではいま、「Global Corporate Governance Network」という世界銀行がつくろうとしている研究ネットワークに参加、世界のさまざまな国の研究者と連携しながら、「コーポレートガバナンス」の研究を進めているのです。

過去と現在を行き来して、 複雑な事象を解きほぐす 「探偵」を楽しみながら、 将来の政策提言をめざす

銀行に限らず、「コーポレートガバナンス」の構造を明らかにし、現状や問題点を正確に把握していくためには、過去に遡ってデータを集め、分析し、客観的な事実を掘り起こしていかなければなりません。こうした複雑な要素を一つ一つ解きほぐし、何がどうなっているのかを探求することは、まるで「探偵」にでもなったような面白さがあります。大学の図書館にこもって、保存されている30年分のアニュアルレポートを分析したり、銀行を訪問して経営層の方々へインタビューしたりと、机上の研究からだけでは得られない生き生きとした活動に非常な魅力を感じています。一つ一つの事象を積み上げて掘り下げ、さらに理論と照らし合わせながら本質を追究していくミクロからのアプローチは、マクロからは見えないものも明らかにしてくれます。ときにはブラックボックス化してしまう「経営」というものを照射するには、ミクロからのアプローチは特に有効ではないかと思っています。

理論は普遍的であるべきですが、研究には対象とするものの背景まで踏み込んでいかなければなりません。最初に申し上げたように、「コーポレートガバナンス」のあり方は、その国の事情がわからないと理解できないのです。日本にいて日本の銀行の研究ができることを、私はとてもハッピーに感じています。

経済制度研究センターが、世界の研究者と手を結んで進めている「コーポレートガバナンス」の研究は、経済発展のためのアプローチを探る基本研究です。じっくり腰を据え、研究を積み上げ、将来はそれぞれの国に貢献できる政策提言を行っていくことが、私たち共通の目標なのです。(談)



理解のレベルと深さを耕す

茶道の千家に「表」と「裏」の二つの流派があるように、企業戦略論には二つの視点があります。わかりやすい例として、「 Yankeesの松井選手は、なぜ高収入を得られるのか」を考えてみましょう。その要因はまず、一流選手に高収入が約束されている野球というスポーツを選択したこと、次に特に報酬の高いアメリカの大リーグを選択したこと、なかでも人気のあるNY Yankeesに所属している、と分析していくことができます。こうした、環境や状況といった外の視点からのアプローチ（outside-in）を「ポジショニングの戦略論」といいます。いわば戦略論の「表千家」です。これに対して、松井選手は身体能力が優れている、ことに動体視力が際立っている、だから好成績をあげられ、報酬の高い Yankeesで活躍できる、そのパフォーマンスの結果として高収入が得られるという、松井選手の持っている能力に注目する考え方（inside-out）もできます。これが「裏千家」で、「組織能力の戦略論」です。

もちろん、「表」と「裏」のどちらが優れているかということではありません。outside-inの視点から考えると、「なぜ野球は他のプロスポーツと比べて選手に高収入を支払うことができるのか」という問題を発見できるでしょうし、inside-outの視点をとれば「何をもって優れた能力とするのか」という問題が見えてくるはずです。このように、二つの視点を同時に学ぶことで、

より立体的かつ深い理解が得られるということが重要なのです。

複数の視点をもつことには、もう一つ大きな意味があります。それは、多様な視点を駆使することで、一つの視座からでは説明のつきにくいことも解明していけるということです。例えば、戦略論的にハーレーダビッドソンとホンダを比較するとき、バイク業界のなかでのポジショニングというoutside-inの考え方で解明していくことができます。しかし、自動車産業のトヨタとフォードのケースでは、そうはいきません。セブン・イレブンとファミリーマートとの比較でも同様です。こうした場合、inside-outのアプローチが有効になるということです。さらにいえば、トヨタの戦略を考える上で、有名な生産方式を理解するだけでは不十分です。なぜ、他の企業がそれを真似することができないのか、模倣の困難性を考えていけば、なぜトヨタが持続的に利益を上げているのかについてより深い理解を得ることができます。MBAに求められているのは、そこまで考えを進めていける知識であり、能力なのです。

少人数・20カ国の学生・ 実務経験豊かな教員 ICSの「資産」を活かし、 本質重視の教育を実践

ICSのMBAコースでは、戦略を教える際に、outside-inとinside-outの二つの視点を獲得し、駆使していけるカリキュラムを実現しています。具体的にいえば、まず竹内教授の授

「Yankeesの松井はなぜ、高収入か？」
二つの視点からのアプローチで
現象の先の問題点にまで肉薄する

業でX社のケースをoutside-inの視点から扱い、次に同じX社のケースを僕がもうひとつのコースで違う視点から検討していくといった具合です。これも、ICSが少人数のビジネススクールであり、かつ教員が緊密に連携しているからこそ可能なことです。

いまアメリカを中心としたビジネス社会では、MBAに対して財務や会計の知識、プレゼンテーション能力や交渉力など実務的なスキルを求める傾向が強くなっています。確かに、MBAコースで学ぶことで、できなかったことができるようになり、経営に必要な高度の実務能力が身につくことは大事なことでしょう。しかし、スキルだけでは十分ではありません。ICSでは、経営人材に必要なより本質的な能力、「見えないものを見る」ための視点の獲得を重視した教育にも力を入れています。ICSでは世界20カ国の学生が学んでおり、教員もアメリカの投資銀行で活躍した人や弁護士等々、多様なバックグラウンドと実務経験をもつ人材が揃っています。少人数の密度の高い授業を通して多様なモノの見方にごく自然にふれ、経営人材に必要な視点を獲得し、さらに拡大していけるカリキュラム、そしてインターナショナルでありながら日本にしっかりと軸足を置いた環境は、ICSの大きな資産だと思います。(談)



国際企業戦略研究科助教授

楠木 建

Ken Kusunoki

1964年生まれ。1987年一橋大学商学部卒。

一橋大学商学研究科博士課程単位修得。

研究テーマは、イノベーションの組織と戦略。

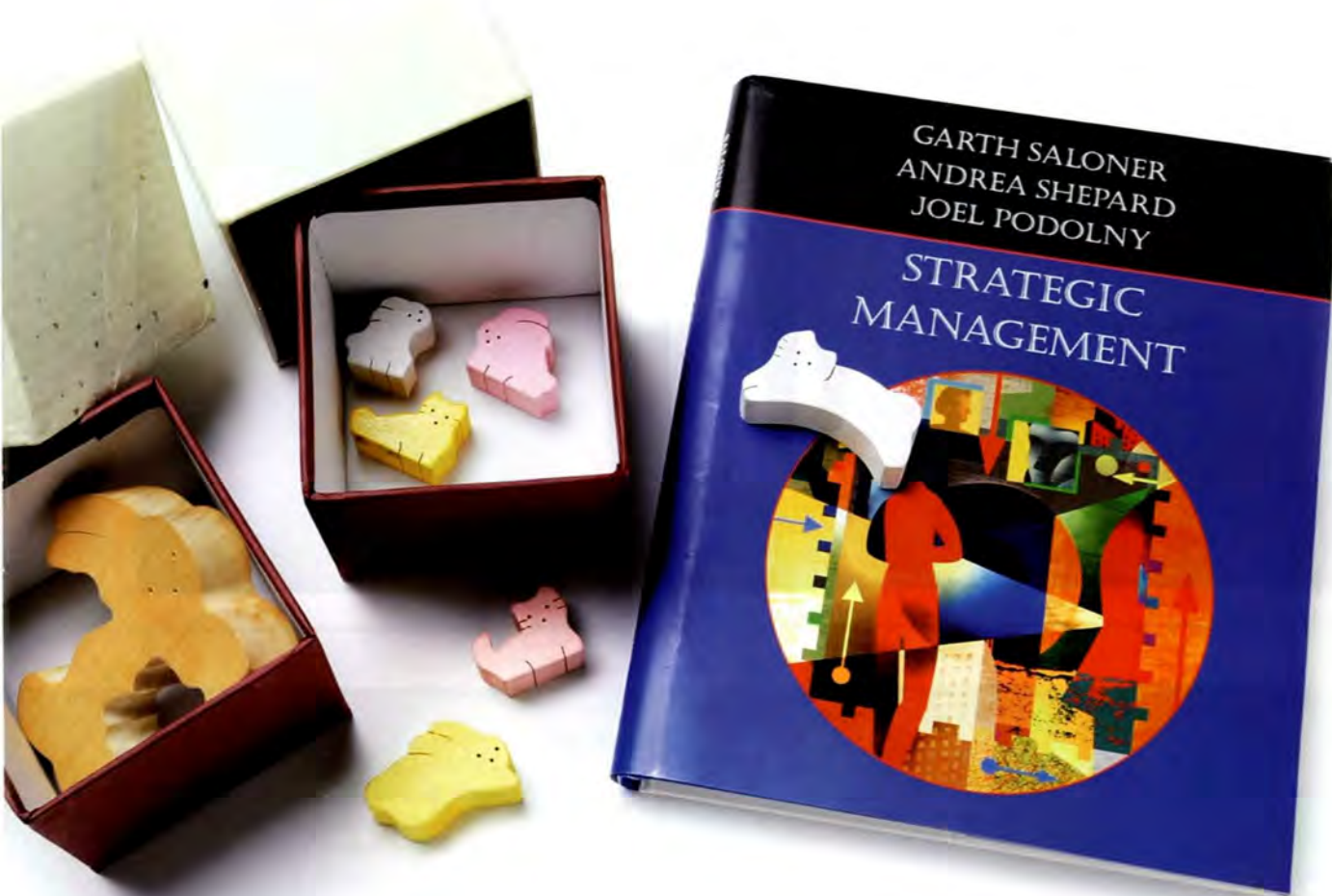
好きなことは音楽を聴くことと演奏すること。

エルヴィス・プレスリーの大ファンで、

特に72～73年のエルヴィスが好きだという。



研究室訪問



求める全ての者に、学問の扉は開かれる

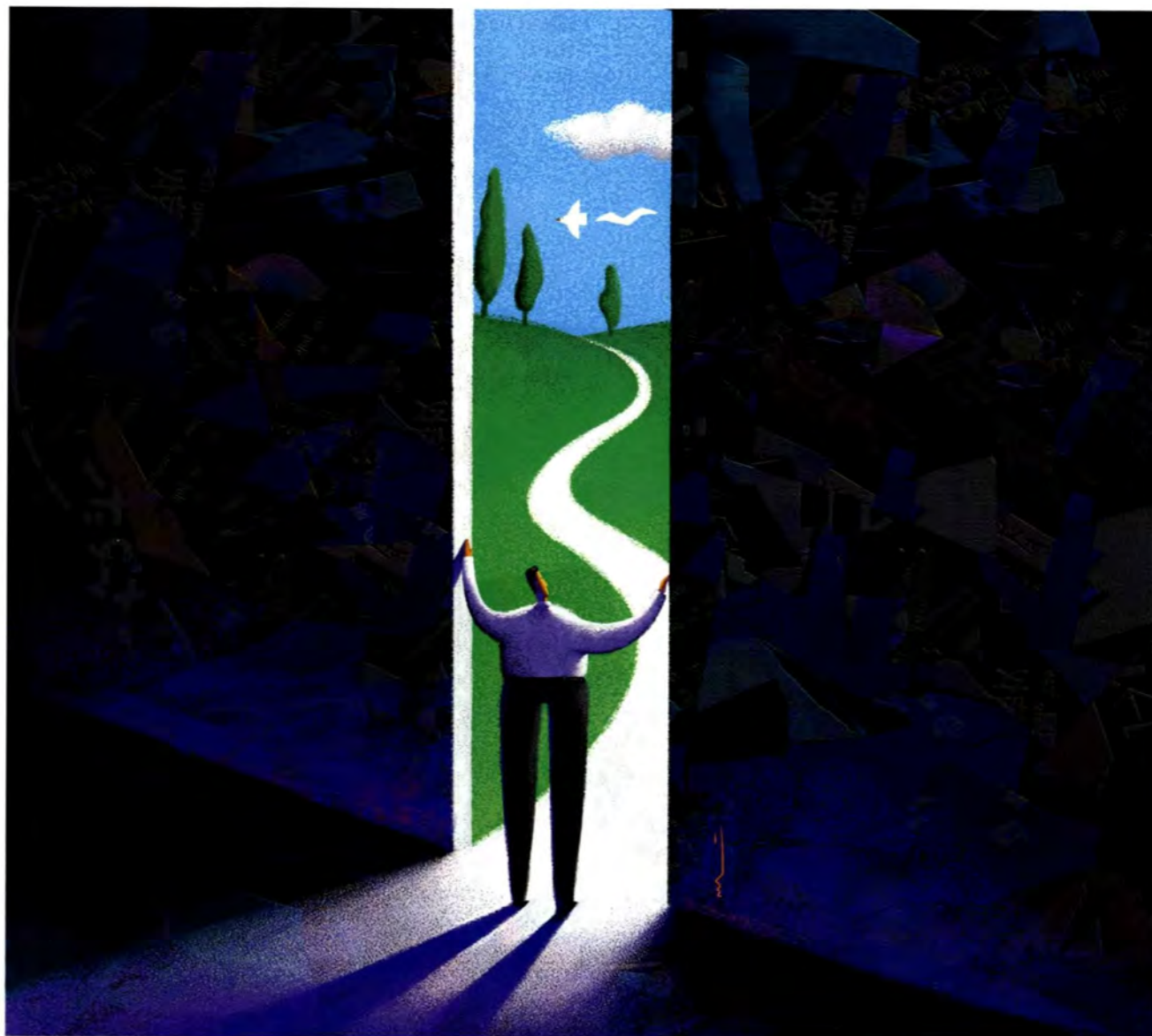
さらに高度な研究を目指し、大学院に進む。

キャリアアップ、キャリア変更のために高度専門知識を学ぶ。自らの学習意欲を成就させる。

一橋大学は、学びを求める全ての人々に機会が与えられるよう、進化し続ける。

記事では、一度社会に出てから改めて一橋大学の門を叩いた学生の方々に、

それぞれの学習目的について語っていただいた。



学卒者、社会人、留学生
学びを求める全てのの人に、大学は開かれる

平成18年度入試関連情報は、各研究科HPをご覧ください。

商学研究科

- 経営学修士コース【MBA】
 - 研究者養成コース【経営・会計専攻】【市場・金融専攻】
 - 博士後期課程編入学【経営・会計専攻】【市場・金融専攻】
 - 留学生特別選考【MBA】【経営・会計専攻】【市場・金融専攻】
- <http://www.cm.hit-u.ac.jp/>

「学問は一生のこと」、そして社会に役立てること 第三の人生をフルパワーで、学ぶ喜びに生きる



伊藤 武
社会学研究科
博士課程

学問の魅力は、 簡単には手が届かない高みにあること

2度目の定年退職を迎えた1994年、経済学部で聴講生になり、2年後に70歳で学士入学しました。大学で学ぼうと決めた理由は、二つあります。一つは、純粋に学びたいという気持ちです。私は小樽経済専門学校を卒業、東大の一年間を経て、一橋の前身である東京商科大学に在学しました。しかし、ちょうど戦中戦後の混乱期でもあり、貧乏学生だったため十分に勉強ができませんでした。「学問は一生のこと」簡単には手の届かない高いところにあることが、学問の最大の魅力です。だからこそ、思い切り勉強したい。先生を慕って入学した一橋で、もう一度しっかり勉強したいという気持ちをずっともち続けてきました。定年退職はその好機、やれなかったことをやれるという嬉しさで一杯でした。From now on!

若い人のメンタリティをより理解できるようにもなりました。また、内外の他大学の先生の講義を聞ける機会に恵まれたのもありがたいこと。東大や筑波大、慶應大、青山学院大、麗澤大などの諸先生の講義や研究会に参加できたのも、一橋に在学していたおかげです。

師を尊敬する気持ちが、学問を深める

私は2年間聴講生として学び、商科大学卒の特例として96年に学士入学しました。聴講生でも学部生でも「学生」であることは同じはずですが、やはり気持ちも、得るものも違います。ことに一橋の先生方は指導に熱心ですから、提出したレポートや発言にはキチンと批評を頂けます。それによって自分の足りないところがわかり、目標地点へとより早く到達していけるのです。学ぶことは楽しいことですが、学問は遊びではありません。正式に入学したからこそ、得られた喜びは非常に大きなものでした。

もう一つ強く感じたのは、学問の師である先生を尊敬する気持ちの大切さです。囲碁や将棋ではプロの打つ一手と素人の一手では天と地ほどの開きがありますが、学問も同じです。学問への謙虚さと師を尊敬する気持ちをもつことが、

学問をより深めてくれるのです。

一橋での学生生活も今年で10年目、博士課程の論文を残すのみです。学部で学ぶうちに日本の経済社会史への関心が深まり、博士課程は社会学研究科を選びました。いま研究テーマとしている戦後の金融政策は、まさに私の日本銀行での31年間と重なります。自分自身を生体解剖する思いがしますが、だからこそ「やってやろうじゃないか」と性根が座ります。厳しいけれど、実に面白い。まさに学問の醍醐味を満喫している日々です。(談)

*一橋大学では旧東京商科大学出身者(本学出身者を含む)に限り学士入学を認めています。

学問は一生のこと

もう一つの理由は、恩返しです。私は金融業界で43年間働いてきました。その間はもちろん、この世に生を受けてから多くの人的ご好意を受けてきました。無償で何かお返しをしたい、そのためには、新しい学問や思想が肝心です。時代も世の中も学問も大きく変化し、発展していますから、実社会の経験に依存していただければ社会に貢献することができません。新しい学問を学んで、若い人たちは異なる側面で貢献したいと思ったのです。

「未知との遭遇」から広がったチャンス

私にとって先生方は子どもの、学生は孫の年齢にあたります。また、学問も予想以上に進化しており、最初はまさに「未知との遭遇」でした。例えば、数理経済学で、当初は数学に四苦八苦し、マイナス評価を取ったこともあります。でも、難しいからこそ挑戦のしがいがあるし、厳しい指導を受けてこそ早く吸収できるもの。新入生向けの入門講座を受講することで苦手の数学をある程度克服しました。意欲があれば知恵もわいてくるのです。

若くて優秀な、多くの「学友」との交流も、得難い体験でした。学問や研究ではお互いに同等。対等につきあうことで、

◆伊藤 武 (いとう・たける)

1926年生まれ。1951年4月東京商科大学卒。同年日本銀行入行。統計局・調査局・外国局・人事局・審査局等を歴任。82年定年退職後、(財)日本共同証券事務局長。94年定年退職。同年一橋大学経済学部聴講生。96年経済学部3年に編入学。98年経済研究科修士課程に進学。2000年修士課程了。2001年社会学研究科博士課程に進学。

経済学研究科

- 修士課程専修コース【経済理論・経済統計専攻】【応用経済専攻】【経済史・地域経済専攻】【比較経済・地域開発専攻】
- 修士課程研究者養成コース【経済理論・経済統計専攻】【応用経済専攻】【経済史・地域経済専攻】【比較経済・地域開発専攻】
- 博士後期課程編入学【経済理論・経済統計専攻】【応用経済専攻】【経済史・地域経済専攻】【比較経済・地域開発専攻】
- 特別選考(AO入試)による社会人博士後期課程編入学【経済理論・経済統計専攻】【応用経済専攻】【経済史・地域経済専攻】【比較経済・地域開発専攻】
- 特別選考(AO入試)による外国人博士後期課程編入学【経済理論・経済統計専攻】【応用経済専攻】【経済史・地域経済専攻】【比較経済・地域開発専攻】
- 外国人特別選考【経済理論・経済統計専攻】【応用経済専攻】【経済史・地域経済専攻】【比較経済・地域開発専攻】

<http://www.econ.hit-u.ac.jp/>

「120の力」が得られる環境を活かして
社会が必要とする「ビジネスに強い弁護士」をめざす



佐野綾子

法科大学院
未修者コース1年

目標への挑戦

「いましかない」という決断

2001年のエンロンの破綻やITバブルの崩壊で、アメリカの金融市場に起きた大きな改革の流れが、弁護士という仕事への目を開いてくれました。コンプライアンスに則って問題発生を未然に防ぐといった弁護士の果たす役割を知り、「弁護士が社会で活躍できる場はこんなに広いんだ」と新鮮な驚きを覚えたのです。当時私の所属していた調査部門でも、アナリストの独立性を確保するため他部門との情報のやりとりや投資情報提供の規制が格段に厳しくなり、法の経済社会に与える影響の重みを実感したことも、企業法務への興味を加速してくれたと思います。でも、弁護士への道を決断するまでには、迷いもありました。外資系証券の調査部門は自分が望んで選んだ仕事でしたから、「このままキャリアを磨く」「企業法務へ転換できるよう勉強をする」「弁護士をめざす」、この三つの選択肢の間で揺れ動いたことも事実です。

弁護士を目指すことを選んだのは、二つの要因が決め手となりました。一つは、「法科大学院」という制度ができたこと。もう一つは、プロとして仕事をするには、自分の仕事に100%の力を尽くさなければならないという思いです。中途半端な自分ではいけない。最終的には、未知の世界に飛び込むならいましかない、と決断しました。初年度の入試を避け、じっくり準備し、1年後に受験するという選択肢もあったかもしれませんが、社会で経験する1～2年は将来の差になります。だから、たとえ希望の大学院に合格できなくても、次年度に再挑戦するつもりはありませんでした。自分のキャリアに空白の期間をおくべきではないし、もし不合格だったら法律に向いていないと割り切って、別の道を考えようと思ったのです。

未知のフィールドに仕事経験が活きる

企業法務という卒業後の目標はハッキリ見えていたから、法科大学院の選択で重視したのは「ビジネスに強い」「少人数でしっかり学べる」の2点。それが母校の一橋だったのは、ちょっと嬉しい偶然でした。実際に入学して、この選択は正解だったと実感しています。何より嬉しいのは、非常に

レベルの高い勉強ができることと、仕事や自らの勉強で得た知識が法律という未知のフィールドでも活かせることです。例えば、民法の授業でオペレーティングリースやサブリースの事例を紹介された場合、それらに関する法的概念は初めてでも、今までの経験と照らし合わせて考えていくと、全体の流れがスッと理解できるということです。その上、未修者コースの学生は、金融やコンサルティング・ファーム、出版社等々、一人一人異なる社会経験や専攻をもっていますから、他の学生の発言を聞いて、「こういう視点もあるんだ」と驚かされることも。先生方も、「おもしろい視点だね」と教えることを楽しんでおられます。

「法科大学院」はスタートしたばかりですから、最初は先生方にも学生にもとまどいがあったように思います。でも、もっともっと良くしていきたい・実のあるものにしたいという熱意は共通です。先生方は「どういう風にしたらいいと思う？」と率直に問いかけてくれますし、学生も「こうしたらどうでしょう」と改善策を提案できます。こうした率直さやリベラリズムも、一橋のいいところだと改めて感じています。

もう一つ一橋ならではのと思うのは、法というものの本質に迫る講義が受けられること。「120の力をつけて巣立ってほしい」と後藤先生（法科大学院長）がいわれたように、どれも水準の高い授業ですから、それを100%理解していくことが現実的な結果をつれてきてくれると思います。学生も本気ですから、真剣に授業に参加するのはもちろん、自分たちが勉強を深めようと、自主的に勉強会を開いています。私も苦手の憲法の自主ゼミに所属しています。また、ビジネスに重要な会計・金融知識を得るために、在学中にCPA（米国公認会計士）の資格を取得するつもりです。そして次の目標は、法科大学院一期生として優れた実績を出していくこと。社会が必要としている法曹家をめざして本当の実力を身につけていきたいと思っています。（談）

◆佐野綾子（さの・あやこ）

一橋大学経済学部卒。2000年から2003年までゴールドマン・サックス証券会社にて調査部勤務（経済調査）。2004年4月、法科大学院入学。

法学研究科

- 修士課程一般選抜【法学・国際関係専攻】
 - 修士課程社会人特別選抜【法学・国際関係専攻】
 - 修士課程外国人特別選考【法学・国際関係専攻】
 - 博士後期課程編入学研究者養成コース【法学・国際関係専攻】
 - 博士後期課程編入学応用研究コース【法学・国際関係専攻】
 - 博士後期課程編入学応用研究コース社会人特別選考【法学・国際関係専攻】
- <http://www.law.hit-u.ac.jp/>

社会学研究科

- 修士課程一般選抜【総合社会科学専攻】【地球社会研究専攻】
 - 修士課程社会人特別選考【総合社会科学専攻】
 - 外国人特別選考【総合社会科学専攻】【地球社会研究専攻】
 - 博士後期課程編入学【総合社会科学専攻】【地球社会研究専攻】
- <http://www.soc.hit-u.ac.jp/>

キャリアチェンジへの選択

MBA取得は、キャリアチェンジの為の一手段であって、目的ではない
求めるのは「自分らしさ」。仕事においても人生においても、
自分で納得した上で一つ一つの選択をしていきたい



古川智子

国際企業戦略研究科
経営・金融専攻
国際経営戦略コース
修士課程 (MBA)

生き方のキーワードは「自分らしさの追求」

仕事や生き方を考える際、最初に心に浮かぶのは「自分らしさを大切にしたい」という事です。常に真摯に自分と向き合い、自己を向上させる為のひたむきな努力を心掛ける事により、仕事においても、人生においても、自分の可能性を最大限に生かす選択が出来るのではないかと考えています。こうした思いが結果としてキャリアチェンジの決意に、そしてICS (国際企業戦略研究科) への進学へとつながったのです。

私は大学卒業後、6年間大手メーカーの法人営業部門にてエグゼクティブアシスタント及びマーケティングアシスタントとして勤務しましたが、そうした経験をきっかけとして、顧客とのコミュニケーションをベースとしたマーケティングという分野で自分のキャリアを積み上げていきたいと考える様になりました。その目標を実現する為に、社内公募での異動・転職を含めた様々なオプションを検討しましたが、当時の私にとっての最良の選択はMBA取得であるという結論に達しました。

ビジネススクール進学は、キャリアの中断というリスクを伴いますし、学んだものが次のキャリアに活かさなければ、単なる回り道に終わってしまいます。また、こうした決断の際には、自分を取り巻く環境 (家族等) も考慮しなければなりません。ですから、キャリアアップやキャリアチェンジを検討されている全ての方々にとってMBAが最良の選択という訳ではない、という事は敢えて申し上げておきたいと思います。私の場合は目的達成に必要な手段がMBAという結論を出しましたが、他の選択肢がより良い結果をもたらすという場合もあるかもしれません。

限界まで頑張った経験が大きな資産をもたらす

勤めていた会社を退職し、別の会社に勤務しながら進学のための準備を開始しました。朝一時間早く起きてGMATに取り組み、通勤電車のなかではTOEFLや小論文、週末は集中して勉強といった具合です。確かに厳しい毎日でしたが、受験生は皆さん同様の経験をされている訳ですし、目標達成の為に必要なステップでしたので何とか乗り切りました。最初は海外のビジネススクールへの進学も考えていましたが、日本にいながらグローバルな環境で学べるICSの存在を知り、方向転換して2002年10月に入学しました。

久しぶりに戻った学生生活の最初の1年間は非常に密度が濃く、かつ本当にハードなものでした。授業も発表やレポートも、しっかりした事前準備が要求されます。少人数の上に、クラスメイトは16カ国からの留学生で、ディスカッションでは論理性と説得力、プレゼンテーション能力が厳しく問われます。リスクを冒して自分から飛び込んだ学生生活に悔いを残したくはなかったので、限

界まで頑張ったつもりです。だからこそ取極は大きかったですし、この先どんな事があっても対処するバイタリティはある、という自信もつきました。そして何より大切な資産は2年間を共にしたクラスメイトとのネットワークです。

社会に貢献できるビジネス・パーソンをめざして

ICSを選んで良かったと思う理由は多々あります。「違う事は良い事」と実感として受け止められるようになった事も、その一つです。様々なバックグラウンドを持つクラスメイトとのチームワークを通じて、どんな人でもその人の持ち味を生かしたチームへの貢献が可能であるという事、そうした協力が出来ればその成果は単なる足し算ではなく、掛け算になって思わぬ効果を生み出すという事を身をもって知りました。

もう一つは、自分が本当にやりたいフィールドを発見できた事です。在学中の2年間は、自分に足りないものを補う為の勉強に打ち込むと同時に、今後自分の進むべき道を模索する期間でもありました。以前から「社会に貢献している事を実感出来る仕事がしたい」という思いがありましたが、「Global Citizenship」等の授業をきっかけに更に強まったその思いを実現する場として、卒業後の進路を製薬業界に決めました。オファーを頂いたノボ・ノルディスクファーマ株式会社はデンマークに本社を置く中規模医療医薬品メーカーで、3つの領域に特化した製品を提供しています。中でもインシュリンではトップレベルのシェアを誇る企業です。この企業を選択した理由は、やはり「自分らしさを追求出来るかどうか」でした。その為の私なりの判断基準は、業界において明確な強みを持つ企業であるという事、自分の能力を最大限に伸ばし、活用する為のチャンスをもらえる場であり、且つ自分が一緒に働きたいと思える人達が居る企業である、というものでした。未経験の業界なので今後勉強しなければならない課題は山積みですが、好きで選んだ仕事ですので苦になりません。一日も早く社内の先輩方に追いつきたい、という気持ちはありますが、それを不安感につなげるのではなく、モチベーションを維持する為の原動力として捉えるよう努めています。どの業界の企業も社会の一員としての責任を負っていますが、特に製薬業界という、人の命に深く関わる業界に身を置く人間として、倫理や社会的責任については常に意識して仕事をしたいと思っています。(談)

◆古川智子 (ふるかわ・ともしこ)

1993年上智大学外国語学部卒。同年大手電気メーカーに入社。情報通信営業本部部長室に配属。99年同社を退社、通信会社に勤務するかたわら、ビジネススクール進学を準備。2002年一橋大学大学院国際企業戦略研究科入学。2004年外資系製薬会社ノボ・ノルディスクファーマ株式会社に就職。マーケティング本部ビジネスディベロップメント所属。

言語社会研究科

- 修士課程【言語社会専攻】
 - 博士後期課程編入【言語社会専攻】
- <http://www.hit-u.ac.jp/gengo/top/index.htm>

国際企業戦略研究科

- 専門職学位課程
 - 国際経営戦略コース (社会人特別選考) [MBA]
 - 金融戦略コース (社会人特別選考) [MBA]
 - 修士課程
 - 経営法務コース (社会人特別選考)
 - 博士後期課程
 - 国際経営戦略コース (社会人特別選考)
 - 金融戦略コース (一般)
 - 経営法務コース (社会人特別選考)
- <http://www.ics.hit-u.ac.jp/>

法科大学院

- 未修者コース
 - 既修者コース
- <http://www.law.hit-u.ac.jp/lawschool.html>

国際・公共政策大学院

(平成17年4月開設予定)

<http://www.hit-u.ac.jp/ipp>

一橋の女性たち

各界で活躍中のエネルギー豊富な人材が多いと評判の一橋出身の女性たち。
彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生のビジョンをいだいているのか？

HQでは、連載でお話を伺ってきたいと思います。

第4回は、国際弁護士の澤井憲子さんにご登場頂きました。

聞き手は、編集委員、社会学研究科の足羽與志子です。

そのときどきでベストを尽くすことが、 次の流れを運んでくる

回り道をしながら将来を模索 限られていた選択肢から自然体で選んだ

足羽 澤井さんは女性の国際弁護士として草分けの一人ですが、大学に入学するときから弁護士を志していらしたのですか。

澤井 いえ、全然（笑）。私は小学校から高校までエスカレーター式でした。12年間も同じところへ通い、同じ顔を見てきましたから、大学ぐらい違うところへ行きたいと思いました。法律を学びたかったので、法学部があつてなるべく都心から離れた大学を探したんです。司法試験はアタマのいい人が受けるもの、自分には縁のないものだと思っていました。

足羽 学生でいらした70年代当時はまだ4年制の国立大学に行く女子学生が大変少ない時代でしたね。

澤井 同期入学の女性は、4学部合わせて13人。法学部は4人でした。入試のときから、少ないというのはわかっていましたから、特に意識はしませんでしたね。ただ、周りがやさしくしてくれて、い

い友だちがたくさんできた。その一人がウチの主人です（笑）。

足羽 当時はまだ、女性が働くのは当然、という共通の社会認識も薄く、4大卒の女性の一般の就職先も極端に少ないなか、どんな思いで将来を考えておられましたか。

澤井 絶対、社会進出するぞ、といった肩を怒らせた発想はなく、主婦になるという選択肢にも誘惑されましたが、小中高と学んできた環境が女性も働くことを当然とする環境だったと思います。多分時代を先取りしていた環境にいたのだと思います。小中高と男女共学でしたが、同級生の女性はまだかなりの数の方が働いています。そのような環境に私を入れたという家族の思いに応えたかったこと。もう一つは、4年生になって「仕事がない」という現実にあつたことです。当時、4大卒の女性の選択肢は本当に限られていて、ビジネスパーソンになるのはまず不可能でした。働くとするば国家資格をとってそれを活かすか、公務員になるか、研究者になるか、のいずれかでしたね。これはマジメに将来を考えなければいけないと思いました。大学紛争の時代でいろいろあつても、自分がどうしたいのか見えてこない。とりあえず時間を稼ごうと、社会学部に



澤井憲子（さわい・のりこ）

弁護士。
昭和46年、一橋大学法学部卒。
昭和48年社会学部卒。
渉外法律事務所弁護士生活をスタート。
以来、国際弁護士として活躍。
平成9年、共同事務所を設立。
一橋大学法科大学院の
エクスターニッシュを受け入れるなど。
若い人材の育成にも尽力している。
私生活では一男一女の母。

足羽與志子（あしわ・よしこ）

社会学研究科教授



編入し、フランス文学を専攻しました。

2年間も余分に遊んだわけですから、もうそれ以上モラトリアムはいやでした。そこで、いまあげた選択肢のなかから司法試験を受ける道を選びました。そのころは、頭のよい人でなくても真面目に勉強すれば受かる試験だということが判っていました。でも、合格は3度目のとき。中途半端で諦めたくはなかったので、これが最後と決めて挑戦した。司法修習生になったのは28歳のときです。

足羽 そのころはもうご結婚を？

澤井 大学を卒業して比較的早い時期に結婚しました。実は、司法修習生のときに最初の子どもを出産しました。同期500名のうち女性は30人ぐらい。産休制度ありませんでしたから、指導教官等周りの方に色々助けられて卒業できました。母もそうですし、周りの方々のサポートがあったから、ずっと続けてこれたんです。

弁護士は100%サービス業 顧客満足を追求する

足羽 弁護士の中でも国際弁護士を選ばれたのはなぜですか。

澤井 英語は好きでし、大学では英米法のゼミでしたから、国際弁護士をめざすというのは私にとっては自然な道筋でした。夫も弁護士で。でも同じ専門には絶対なりたくないという気持ちもありましたけれど(笑)。

この分野を選んでよかったと思うのは、私の接したクライアントは殆どが日本に進出したり、日本との合弁会社を作るアメリカの会社だったのですが、アメリカでは女性の弁護士が多いので、クライアントにとっては担当が女性でも別に特異なことでも何でもなかったことです。最初に所属した事務所のアメリカ人のボスもそう。一人のプロフェッショナルとしての対応をしてもらえたのはラッキーでした。

足羽 お仕事の内容は？

澤井 日本でビジネスを始めたいという外資、米国企業の数が多いのですが、そのリーガル・サポートをする仕事を中心です。私がいたのは日本で草分けの渉外事務所の一つでし、当時は日本企業が

盛んに海外の技術やライセンスを買っていた時代。海外の企業が日本で、あるいは日本とビジネスをやる際の法的なアドバイスをしていく仕事です。

足羽 80年代当時と現在ではビジネス環境も変わっていますし、ご自身も独立して共同事務所をもたれている。長く成功を続けてこら

れたポイントは何でしょうか。



澤井 こうした分野の仕事は、クライアントと長いおつきあいになります。前の事務所から引き続きという企業もありますし、新しいクライアントも何らか

の形で他のクライアントの紹介です。クライアントの要望にスピーディに応え、的確なサービスを提供することがポイントですね。

足羽 「サービス」ですね。

澤井 弁護士業は100%サービス業ですよ。このことは、アメリカ人のボスに叩き込まれました。弁護士という仕事は、クライアントとの信頼関係が基本になります。信頼感をもっていただくためには、例えば言い方にしても相手に安心してもらえる言い方がある。それをいつも念頭に置くのは、サービス業として当然のあり方です。クライアントのために何ができるか、つねに考えろ、と教えられました。

足羽 洋の東西を問わず「信用」や「信頼」が重要な企業資源として注目されていますが、渉外関係での弁護士とクライアントの信頼関係を具体的にいうと？

澤井 何かあったとき、あの人に相談にいけば何とかしてくれる、あるいはあの人と組んで仕事をすれば仕事がうまくいくからあの人と仕事がしたい、と相手に思われるということでしょうね。そのためには、つねにキチンと約束を守ること大事ですし、相手が何を求めているのか、ちゃんと把握していなければなりません。長いおつきあいにねばなるほど、相手の求めていることがわかってきま



すから、持続することはプラスになってきます。

足羽 語学もそうですが、人間としてのコミュニケーション能力も重要ですね。

澤井 英語力は必要ですが、ネイティブではありませんからネイティブのように英語はしゃべれないし書けないというのは、当たり前です。英語はコミュニケーションのツールであり、英語ができなければコミュニケーションはできませんが、英語ができればコミュニケーションができるというものではありません。信頼関係とお客様に対し何がベストなのかを判断する努力があって、初めてコミュニケーションができるのではないのでしょうか。

足羽 日本とアメリカは近くなったとはいえ、法制度から商習慣、倫理観から価値システムまでも異なりますから、双方の利害からむ交渉となると、難しいことも多いのでは？

澤井 私が仕事を始めた当時は、アメリカ流をそのまま持ち込んできた企業もありましたが、最近では皆さん日本のやり方を尊重しようという姿勢をお持ちです。そうは言ってももともと土壌やシステムが違いますから、やはり食い違う部分もある。具体例でいいますと、訴訟に対する考え方や従業員の解雇の問題などがあります。前者でいえば、日本で訴訟を起こすのは、時間やコストを考えると得策でない場合が多いのでその点を理解してもらわないといけない。落としどころをどう詰めていくか、本社の法務部門とやりとりすることも多いですね。

後者の解雇も、アメリカでは簡単にできて日本では難しい。規定の退職金に上乗せをするという日本的なやり方は、アメリカ人からみると納得しがたい場合もあるんです。あるとき会社側の事情である方に会社を辞めていただくことになった。会社より日本の慣習はどうなのかと聞かれて、その旨説明し、その方には日本のやり方に従い辞めていただきました。その後、その辞めた方が転職先の企業から私のところに仕事をもってきてくださったのは嬉しかったですね。



計算や戦略がその通りにいくとは限らない。
そのときどきでベストを重ね、常に準備を整えておく

足羽 日本でもロースクールがスタートし、一方、法律事務所の大型化も進んでいます。弁護士のあり方や仕事環境の変化をどのようにみておられますか。

澤井 若い人のなかにはそんなに弁護士が増えて仕事があるの、と不安感をもっている人もいます。ビジネス環境は今後ますます変化していくでしょうが、その変化がどのようなものかは予測は難しい。多分この事務所も同じだと思いますが、ウチの事務所も今後どうするのか考えていかなければならない。弁護士と



いう仕事でいえば、ジェネラルな経験の上に得意分野を積み上げていくことが必要になってくると思います。でも、広い目でみれば、弁護士の職域はひろがっていきます。グローバル化の進展のなかで、日本企業も海外とのビジネスは当たり前になっている。契約意識が高まっていますし、企業法務の役割もさらに重要になっていくと思います。法律的トレーニングを受けた人は、文章能力もありますし、事務処理能力も高いと思います。企業だけでなく行政にも活躍の場はあると思います。法律知識をもつ人やリーガル・サービスが求められる場面は、さらに増えていくと思います。

足羽 最後に、若い人へのアドバイスを。

澤井 これはいつも若い人に言っていることですが、大学受験の時期を過ぎてしまえば、計算したり戦略をたてて事に当たっても、その通りにいくとは限りません。そのときどきでベストを尽くすことが、次の流れを運んでくると思うんです。チャンスというのは、あるとき突然降ってきます。これをつかむのも能力のうち。つねにうまくいくとは限らないけど、チャンスが降ってきたらすぐにつかむことができるよう、常に努力をつづけていくことが大事だと思います。

対談を終えて

静かな都心のオフィスでの充実した対談でした。常にこやかに、こちらの質問の意図を計りながら、プラスアルファをつけて的確にお答え下さる

澤井さんに。法律家としてだけでなく、人間としてのコミュニケーション能力の高さを感じた。涉外弁護士は、異なる法制度や主張、価値観、文化をもつ双方を可能な限り同じ文法で繋ごうとする翻訳作業でもある。澤井さんが強調する高い専門

知識と総合性。そして信用はあらゆる分野での成功へのキーワードであろう。「女性としてこれまで播も得もなかった」と穏やかに言いきられたのは、摘得の産し引きでは語らない。という強い意志と想像する。
(足羽與志子)

個性は主張する

One and Only One

第 5 話

外務省 アジア大洋州局 南西アジア課長

菊田 豊氏



Y u t a k a
K i k u t a

らしくない外交官は、 偶然にそして必然的につくられた

一橋の卒業生ってビジネスリーダーとして活躍してるってイメージが強いじゃないですか。学生時代のクラブだって英語部とか、スポーツ系でもせいぜいテニスとかゴルフとか。それに比べると僕は体育会剣道部に汗し、公務員として外交官になっている。らしくないOBと言われればそうかもしれませんが、意外に外務省にも一橋出身者は結構いるんですよ。皆僕なんかよりはるかに優秀だということを最初にお断りしておいて、僕自身について言えば、お前はらしくない外交官だな、と、ここでもらしくないと先輩によく言われます。応援の意味が籠もっているときもあれば、呆れ顔のときもある。自分でもそうかもしれないなあと思っていますし、そう言われることはある意味「正しく」評価されてるという気もします。

「らしくない」理由の一つは、外務省に入ってからキャリアがかなり人と違うことかもしれません。外交官といえば、海外の在外公館勤務と本省勤務を行き来するというのが、一般的なイメージで

しょうし、実際多くの外交官はほぼ3年周期でそうしています。ところが僕の場合は、研修時代にワシントンの大使館に形式的に所属したこと以外大使館勤務はいまだ無し。ジュネーブの代表部にいたことはありますが、あとはずっと霞ヶ関です。これを聞くと皆驚きます。

「国内」派に加え、「機能局」派という面もあります。外務省の仕事は大きくわけて「地域」と「機能」の二つのフィールドがあります。「地域」とは、北米やアジアといった地域単位でその地域に属する国々との関係を築いていく、あるいは人のお世話をするという役割で、大使館や領事館の仕事は主にこの「地域局」的業務に属します。これに対して「機能局」的業務は、国連とか条約、あるいは経済、経済協力といった言わば政策テーマ毎に仕事を担当するもので、在外公館では政府代表部の仕事が典型的です。僕は入省20年になりますが、うち16年は「機能局」にいるんです。唯一の在外勤務経験も軍縮会議日本政府代表部で、C T B T（包括的核実験禁止条約）交渉に明け暮れました。だから、現在のアジア大洋州局南西アジア課長のポストは僕にとっては希少な地域課勤務なんです。

自ら志願してこうなったわけではない。でも、自分が外交官を志した理由と重ねてみると、おおむね望んでいた方向へ歩んできてい

「グチらない」
「苦勞の自慢話をしない」
「逃げない」
人生を楽しく生きるための、
僕の方針です



るという気もします。

もう一つ「らしくない」とすれば、ポストにほとんど関心がないこと。いい仕事をしたいとは思いますが、偉くなりたいとか、いいポストにつきたいと思ったことはないですね。むしろ、ポストにいいも悪いもあってはいかんのじゃないかと内心密かに思っています。組織にはある意味ヒエラルキーが必要ですし、人により上をめざす選択肢はあっていいと思う。ただ、僕自身の関心は、そこには向いていないというだけのこと。官僚に限らず、ビジネスマンでもトップに立とうと思えば、上からミスだと思われるようなことはできるだけしないように気をつかうようになるじゃないですか。そんなことは性に合わないし、守りに入った人を見ると大変そうだなあと同情しちゃいます。自分が失点を冒さないために部下を叱咤するようなことは、率直に言ってキライです。

正しい歴史の1ページをつくる そんな人でありたい

今いる南西アジア課が担当するのは、インド・パキスタン・スリランカ・バングラデシュ・ネパール・モルディブ・ブータンの7カ国。顔ぶれをみてわかるように、開発援助と紛争・安全保障の問題がそれぞれ関わっています。インド亜大陸がグローバルシーンで急激に存在感を高めているこの時に、国情や国民性、歴史や文化も違うこれらの国々と日本が、どういう関係を構築していくべきなのか、総合的に判断し、具体策を考えていくことが僕の仕事です。スリランカでやっている「平和の定着外交と経済協力をどう有機的に結びつけていくのか」とか、インドやパキスタンといった「軍備管理・軍縮・不拡散上のテーマを抱える国とどう協力関係を築いていくのか」とか。これまで携わってきた「機能」局での経験が、現在の「地域」局での仕事に生きている。その意味で、これまでの経歴が人と大分毛色が違うということも、自分なりにラッキーな体験にとらえて、だからこそより正しい判断を下していくべき責務があると思っています。

個人的には、「世界に通用する日本(…)の外交官」になりたいですね。外交交渉の場では、お互いが国益の代表ですから、立場の違いは当然あるし駆け引きもでてくる。でもその反面、目に見えない人と人とのつながりや本人の人間としての評価が、難問をはぐし、局面を動かすテコになる場合もあるんです。もっと大きな観点からいえば、外交官という仕事は歴史のページがめくられる音が聞こえる、その瞬間に立ち会うこともあるのが大きな魅力だと思います。それどころか、自分がめくってしまうことすらあるわけです。だからこそ僕は、成績良い官僚と言われるより、自分で正しいページをめくれる人間になりたい。自分が出す提案にはどんなメッセージを込めたいのか、時代の流れの中で何ををつくりたいのか、つねに自分に問いかけ、研鑽を重ねていかねばと肝に銘じていますし、そのプロセスが好きですね。

一橋との出会いと外交官試験

僕は福島出身で、福島高校から一橋大学に進学しました。なぜそうだったかというと、高校3年の夏に大学見学で上京した際、特に志望校ではなかったのですが、一緒に来た友人が一橋を受けるということで軽い気持ちで一橋大学にも行ってみることにしたんです。それが、国立駅に降りた瞬間、ああ、自分はこの街で大学生活を送りたい!と思ってしまった。真っ直ぐに伸びる緑豊かな大学通りの並木道、さりげなく文化の香りがするような街の佇まいと人々、歴史と風格が感じられる図書館や兼松講堂…。浮気したのではないと思います。一目惚れでした。

外交官試験を受けようと思ったのは、あまり純粋な動機ではありません。キャプテン・オブ・インダストリーの一橋を出て実業界で活躍する、でもよかったんです。ただ、そうなるにしても、学生時代にできるだけアタマも体も心も鍛えておきたかった。それに一番便利なのは外交官試験の勉強をすること。外交官試験は、憲法あり国際法あり経済あり外交史あり、もちろん英語も勉強しなければなりませんし、資格試験でなく採用試験ですから人間的魅力も求められる。自分を鍛える方法論として一番間口が広がったんです。

僕にとって幸いだったのは、外交官試験を受ける仲間がいたこと、そして先生方と学生の距離が極めて近いという一橋ならではの恩恵に与ったこと。今たまたまですが、内閣官房長官秘書官も外務大臣秘書官も外務事務次官秘書官(取材当時)も、みな一橋の勉強会で一緒だった先輩後輩なんです。だから、気心が知れている分仕事はやりやすいですよ。僕は外交官試験の選択科目は財政学で受けたんですが、勉強会で、実は模擬試験をしてくれた石先生から満点をもらったことがあるんです。あの時は嬉しかったですね。ああ、自分の勉強方法は間違っていないって思えて。剣道部100周年記念式典の際、有備館で石学長の挨拶を伺ってそんなことを思い出したりしました。折に触れ僕を励ましてくれたりアドバイスくれたりする先輩も多いし、自分が励ました後輩の女の子が司法試験と剣道4段一辺に受かっちゃったり。人と人とのつながりが深く、ずっと持続するのも一橋大学ならではの特徴ですね。



勝つ手段ではなく、相手の心を打つこと 剣道が教えてくれた指針

「正しい判断をしたい」「正しくページをめくれる人間になりたい」という、僕の背骨を培ったのは剣道でしょうね。僕は小学校から大学



省警外
菊田

まで結構選手に選ばれてました。学校を代表して戦う訳ですからとにかく試合に勝つことが大事でした。タイミングをずらした面でもなんでもいい、勝てばいいと思っていました。でも社会人になってある時、8段範士の先生が稽古の途中で構えを解いて僕に向かって怒り出したんです。「君！君ぐらいになったら2、3本当てて喜んでちゃダメだ！相手の「心」を打たなきゃだめだ！」と。最初はよく分からなかったですね。でも、最近ようやく剣道にいう「打って反省、打たれて感謝」という言葉の意味が分かってきたような気がします。倒した相手に、くやしいと感じさせるのはまだまだで、今日この人と稽古をする機会があって有り難かった、嬉しかった、と相手に感動を与えるような剣、そして人間を極めたいですね。

外務省に入ってから暫くは忙しさにかまけて剣道の稽古からは遠ざかっていました。再開のキッカケは息子がイジメにあったこと。息子は僕が軍縮会議日本代表部に勤務していたジュネーブで小学校に入り、3年生まで過ごしました。日本に戻った彼はインターナショナルスクール流の友達の作り方が知らないですから、日本の教室では完璧に異邦人です。自信をなくし、いじめられ、子ども心に傷ついていました。女房がどうしよう、と相談するので、僕は、「簡単だ、剣道をやればいいんだ」と。父に連れられ、近所の剣和会で剣道を始めてみると、竹刀の持ち方から、足の構え方から、道場の床の上では他の子とまったく同じ条件です。先生の言う通りに一生懸命やれば、他の子と変わらないし、努力次第では半歩先んじることできる。今僕は毎週日曜日はその剣和会で自分の子供を含め小学生、中学生、高校生、社会人に剣の手ほどきをしています。少年剣道の良さを再認識しています。子供たちには、損得や勝ち負けではなく、それをなすのが正しいかどうか、という価値判断を持つ人間になってほしい。仕事でも生き方でも、正しいことをやるというのは、実は辛くて、大変なことだけれども、それを貫いていく気持ちと強さをもってほしいと願っています。

僕が人生の3大モットーとしているのは、「グチらない」「苦労の自慢話をしない」「逃げない」こと。そうすれば人生は楽しく生きられる。押しつける気はありませんが、父親としての姿勢だけは伝えたいですね。

ニッポンにもこんなヤツがいたのか！ 情熱をもった外交官を目指して

外務省の仕事は、多分、傍目にみえるよりずっと重責の伴うハードワークであり、危険もつきまといます。外務省の一階にある折り

鶴をもった子どもたちの像は、殉職した職員のためのもの。みんなで基金を出し合い、建立したものです。僕自身だって内戦の地などで何度も生命の危険を感じたことがあります。でも、辞めようと思ったことはないですね。

官僚は、1～3年の短いスパンで仕事が変わりますから、猛スピードでインプットし、猛スピー

ドでアウトプットしていかないといけない。国際外交の場では特にそうですが、膨大なエネルギーとパワーが要求されます。でも、キツイばかりではない。歴史の大きなうねり、そして人との出会いを楽しめる仕事でもあるんです。

南西アジア課員は地域や語学の専門家が多いですが、彼らが「機能局」的な多国間の枠組みでの動きも含めてバランスのとれた眼で見、情熱を込めて仕事ができるように配慮してあげることも、課長としての僕の仕事です。「課員は課長の出世のための兵隊ではない。課員全員が最大パフォーマンスを発揮できるように環境を整えるのが僕の仕事のひとつだ。後で振り返って、あの頃が一番大変だった。でも一番楽しかった。と思える課を作ろう」と課員には明示的に言っています。外務省の全ての職員が元気で、この戦場に奉職して良かったと思える省になってほしいものです。

◆菊田 豊（きくた・ゆたか）

1961年、福島県生まれ。83年、外務公務員採用上級試験合格。84年一橋大学法学部卒業後、外務省に入省、経済局総務参事官室を振り出しに、85年、外交官補として在米日本大使館に所属、87年、大蔵省銀行局調査課へ出向。その後外務省本省に戻り、経済局国際経済第一課、北米局北米第一課、総合外交政策局安全保障政策課を経て、95年一等書記官として軍縮会議日本政府代表部（ジュネーブ）に赴任。98年、経済協力局国際機構課首席事務官、99年、同局政策課企画官、2000年、同局国別計画策定室長。2001年、田中真紀子外務大臣のとき、外務副大臣秘書官を務める。2002年、経済局アジア欧州協力室長。2004年2月から現職。家族は中学のクラブメイトだった妻と3児。スキーはセミプロ級。剣道5段。



One and Only One

法人化は、一橋大学にとってグッド・チャンス 大学と新しい関係を築き、手を携えて 「世界最高水準の大学」をめざす

KEIO
unio
gashira

如水会理事長
味の素株式会社 代表取締役社長
江頭邦雄氏（1962年経済学部卒）



教育の質をさらに高め 日本のトップから世界の一流へ 一橋ならではの人材育成に期待

一橋大学はこの4月、法人として新しいスタートを切りました。このことは一橋大学にとって、大きなチャンスです。大学運営の自由度があがり、大学の真の実力が問われる時代がやってきたからです。

一橋大学は現在でも社会科学の分野で日本のトップレベルにありますが、このチャンスを積極的にとらえ、今後は国際レベル、すなわち「世界最高水準の大学」をめざしてほしいと思います。

ご存じのように大学には、「教育」と「研究」という二つの大きな目的があります。一橋大学はリサーチ・ユニバーシティの伝統をもち、社会科学の分野で多くの優れた研究業績を残してきました。これはこれで大切なことですが、今後は教育の分野でさらなる質の向上を図っていくことが求められていると思います。その理由は明快です。国や社会、産業やビジネスを含めて、日本の将来を担うのは、「人」にほかならないからです。幸い、一橋大学にはゼミという良き伝統があり

ます。ゼミは学問の場であると同時に、人間性を深める全人教育の場でありつづけてきました。一橋大学のエクセレンシーを代表する一つであるゼミの伝統をもう一度見直すとともに、教師と学生とのふれあいの場をもっと増やしていただきたいと思います。

私は、仕事の関係で年間60日ほど海外へ出張します。飛行機のなかや滞在先など、海外へ出かけると自然に日本のことを振り返るようになります。自分の会社のことだけでなく、日本の現状と将来について思うことになるのです。日本の政治は、経済は、文化はと、さまざまなことを考えていくと、行きつく結論は一つ。「人」が大事、「人材の育成」こそ肝要であるということです。

一橋大学はもともとリベラリズムの土壌をもつ、国立大学には珍しい個性ある大学です。この良さと法人化で拡大した運営の自由度をフルに活かし、いままで以上にさまざまな新しい取り組みや改革を行っていただきたいと思います。そして、本当の意味で個性のある、日本のリーダーになれる優れた人材、海外でも通用する国際感覚のある人材を多数、輩出してほしいと思います。他の大学にはない個性化や差別化を推進し、一橋大学らしい質の高い人材を育てることは、日本に新たな活力を与える原動力となっていくことでしょう。



Kunio
Egashira

独立法人に「経営」感覚は不可欠 大学と新しい関係を築いて 如水会だからできることをする

法人としての大学の運営に、まず必要不可欠なことは「経営」のノウハウです。せっかく自由度が広がるのですから、「世界最高水準の大学」をめざし、優秀な人材を育てていくためには、同からの交付金を有効に活かすこと、さらに自ら資金を生み出していくことが必須と思われます。あえていえば、これまでは与えられたお金を使うという立場にありましたが、それ以外に自分たちで資金を生み出し、重点配分を考えて有効に使うこと、そして財政基盤を創造し、さらに拡大していくという「経営」感覚が求められると思います。

そのためにはさまざまな方法があります。例えば、経営学や金融論といった特に秀でた分野で、企業や大学との共同研究や受託研究を積極的に打つことも考えられます。こうした共同研究は現場に即した「実学」を体得するよい機会でもあり、伝統ある「Captains of Industry」の精神にふさわしい取り組みといえるでしょう。また、「資金」「実学」「人材育成」と三拍子そろわねばならず、一石三鳥といえると思います。

如水会としても、独立法人化によって大学と如水会との関係は新しいステージを迎えたと捉えています。如水会には経済界や企業で活躍している人が大勢いますから、その知恵とノウハウを積極的に提供していきたいと思います。経営に関して、大学に助言をしたり、企業と大学との橋渡しをするといった、如水会ならではのお手伝いができるのではないかと考えています。

「大学への寄付で名を残すのは最高の名誉」 世界の一流大学がもつこの文化を 一橋大学にも根づかせたい

「世界最高水準の大学」をめざすことは、如水会にとっても重要なテーマです。そのために、大学への資金的な支援がもっと行えるよう、OBに対して寄付に必要な情報の提供を行うとともに、財団法人一橋大学後援会を活かして会員からの寄付の促進を考えていきたいと思っています。また、現在、一橋大学後援会にプールされているOBからの寄付による基金については、少し時間をかけてその管理方法や今後の使い道などを検討していきたいと思っています。国内では慶應大学、

海外ではハーバード大学が、OBからの寄付金等による資金を潤沢にもって大学をバックアップしていると聞いています。このあたりも参考にしながら進めていきたいと考えています。



寄付はしたいけれど、それにともなう税金等の諸制度がよくわからないというお話もよく耳にします。如水会では、企業に限らず、個人の方も積極的にご寄付いただけるよう、寄付した際の税金についてわかりやすいかたちでご説明していきます。また、遺産の一部をご遺族の方からご寄付いただく場合の相続税についても同様ですし、さらに進んで如水会員の方が生前意思として、遺言のなかで寄付金をあらかじめ決めておく制度の活用など、いろいろ考えていきたいと思っています。

企業からの寄贈でしたが、一橋大学には兼松講堂のように、名前が残るような寄付が寄せられた歴史があります。世界で一流と認められる大学のある国では、OBが大学に寄付をして名を残すことを最高の名誉とする文化が根づいています。一橋大学にもこうした文化が根づくことを願ってやみません。

如水会も21世紀にふさわしい組織へ 透明性をしっかり確保し、 地方や女性、若手の声に耳を傾ける

大学法人化元年というエポックメイキングな年に、如水会理事長に就任したことは、何かのご縁だと思います。

先程申し上げたように、大学と如水会の関係も新しいステージに入ったわけですから、従来の考え方にとらわれずに、斬新な発想による大胆な取り組みによって両者の関係に磨きをかけ、進化させていくことが必要だと考えています。

当然、如水会自体も21世紀にふさわしい組織へと改革していかなければなりません。例えば、物事を決めるにあたって、いま一番求められている透明性はしっかり確保されているのか、キチンと検証し、実現させていきたいと考えています。このほかにも、テーマはたくさんあります。これだけIT化が進んでいるにもかかわらず、地方や海外の支部との距離はまだあるように思われることもその一つ。また、女性や若手が参加しやすい、開かれた組織であるか、等々、いま自分なりに課題を絞りつつあるところです。時間の許す限り、地方や海外の支部をお訪ねするつもりです。女性や若手の会員の声にも耳を傾けて、未来のための改革に取り組んでいきたいと考えています。(談)

歴史の連続と非連続が、そこここに顔を出す。 それがメキシコシティ

海拔2240m。酸素不足でガソリンがよく燃えない。飛行機から遠望すると、この大都会の上空にだけ薄黒いスモッグが溜まっている。高原盆地だから排気ガスが外に流れ出ないのだ。高度ゆえに急ぎ足だと息が切れ、慣れるまでは夜も熟睡しにくい。大都会特有のカオスにも満ちている。そんなメキシコシティに嫌気がさして脱出を図る土地っ子も少なくない。だから、この2000万都市でいつもヨロコビに満たされる私は、彼らから見れば、さしずめマゾ。

ヌエバ・エスパニーヤ。 メキシコ地方はもうひとつの スペインになるはずだった

メキシコシティの前身は、古代アステカ王国の首都テノチティラン。1519年、この町に乗り込んだスペイン人は、壮麗なテノチティランに大きな衝撃を受けた。人口20万、当時としては世界有数の大都会だった。それを2年かけて征服すると、スペイン人はただちに故郷と同じような街づくりに着手した。アステカの神殿を壊し、石材を再利用して教会堂や館を建設。ヌエバ・エスパニーヤ（新スペイン）という地名が示すように、メキシコ地方は、もうひとつのスペインになるはずだった。

だが、地盤はシブトイ。再利用された石材のあちこちから、アステカ時代の神像彫刻が顔をのぞかせている。最近、16世紀に埋め潰された神殿が地下鉄工事で見つかった。移動もままならず、そのまま駅構内の風景に溶け込んだ。毎日数万人の通勤客がそのまわりを往来している。街を行き交うのは、スペイン系、先住民インディオ、混血の人々。征服以来の歴史が目の前を現在形で闊歩している。タテに積み重ねられる歴史年表が、ここでは同時代の風景のなかでヨコに広がっている。歴史の連続と非連続が、そこそこに顔を出す。それがメキシコシティ。

文化の香りあふれる 夏のメキシコシティ

夏のメキシコシティは、写真展、絵画展、詩の朗読会、映画祭など文化行事であふれる。15年ほど前のこと、不思議な連続演奏会の通し券を買った。このシリーズ・コンサートでは、毎回、地図を頼りに市内に散在する演奏会場を探して歩かねばならない。ある日は最新の高層ビルのロビーが会場だという。別の日はアステカ遺跡の横。大聖堂のオルガン下に集合という趣

向も。1930年代のアールデコの個人住宅で、1950年代のモダンなコンサートホールで、という日もあった。土地っ子もあまり足を運ばない街はずれの旧修道院の大広間が会場という晩は、寒くて震えた。



旧市街の植民地時代の建物。かどの礎石は、アステカ時代の「羽毛の蛇」石像の鼻先。

こうして客は、メキシコシティという霊気あふれるトボスに、少しずつ誘い込まれていく。何日も彷徨ううちに、この都市の形状と歴史は、私の身体にも確かに刻み込まれていった。音楽とメキシコシティ論の二重構造。やるじゃないか、メキシコシティ文化局企画課。

ヨーロッパ文明が 移植された非西洋社会。 そこからヨーロッパを研究する

一橋大学は、この大都市にある中南米随一の社会科学教育研究機関、メキシコ大学院大学（コレヒオ・デ・メヒコ）と大学間協定を結ん



メキシコ証券取引所。1990年代以降の経済成長のシンボル。

でいる。数年前、社会学研究科地球社会研究専攻は、この大学院大学から客員教授を一年間招き大きな成果を得た。本年度、同専攻は、法学研究科公共関係法専攻・経済関係法専攻・国際関係専攻、経済学研究科経済史専攻、経済研究所とともに文部科学省から交付金を得て、21世紀COEプログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点―衝突と和解」（代表者：法学研究科山内進教授）を発足させた。研究班のひとつは、「外部の『ヨーロッパ』」班という。「外部の」とは聞きなれないが、メキシコのようなヨーロッパ文明が移植された非西洋圏近代社会の研究をもって、ヨーロッパ研究に新たな地平を開きたいのだ。日本がメキシコとは別の意味で「外部の『ヨーロッパ』」という顔をもつことは、言うまでもない。

ここ2、3年、本学の留学生派遣制度や日本・メキシコ両国間交換留学生制度などを利用し、メキシコシティの大学に学ぶという意欲的な学生が学部・大学院に増えている。若き学生たちには、重層性に富む常春のこの大都会を、高度やスモッグにいたるまで、大いに楽しんでいただきたい。

ただ走る社会心理学者



特別活動?

以前いた大学で「特別活動の理論と方法」という科目を担当したことがある。教育心理学の知識である程度は話せるが、専門外なので「私の特別活動」を話して補うことにした。話したことと言えば「東大伊豆戸田マラソン」「24時間リレーマラソン」「富士登山競走」「アイアンマンハワイ大会」など、いずれもスポーツ大会のことであった。受講生の評価がどうだったかは知らないが、自分では得意げであっただろう。その大学では走友会に入り、文科省の皇居駅伝では、確か3位になったような覚えがある。

国立に来ると、勝手に社会心理走遊会を作って走った。西キャンパスのグラウンドや周囲を走っている人たちはいたが、東キャンパスは静けさに包まれていた。そこで自分なりのコースを考案して走り、ときにはゼミの学生をけしかけて昭和記念公園でリレーマラソン大会に参加した。いい迷惑だったかもしれないが、中には卒論研究をしている11月に、河口湖マラソンと一緒に参加した学生もいた。

エンデュラン・イン・カナダ

昨年の夏休み期間、カナダのウォータールー大学の周辺で開催されたランニング大会に参加する機会を得た。日曜から日曜の8日間のうち7日走るステージレースで、合計で100マイル(160キロメートル)に及ぶチャレンジングな大会だった。

初日の朝早く、一体どうなるのだろうかという不安と期待を抱えながら、会場の公園まで10キロほどを自転車で向かった。初日と最終日は、一般向けの短い距離の大会が併設されていて、人々にぎわっていた。しかし、大会のコースへ走り出したのはたった9名(男7、女2)。世界中から数十万件のアクセスがそのホームページにあったそうだが、1週間も参加するのは奇人な人だけなのだろう。私は唯一のカナダ外からの参加者で、最年長でもあった。

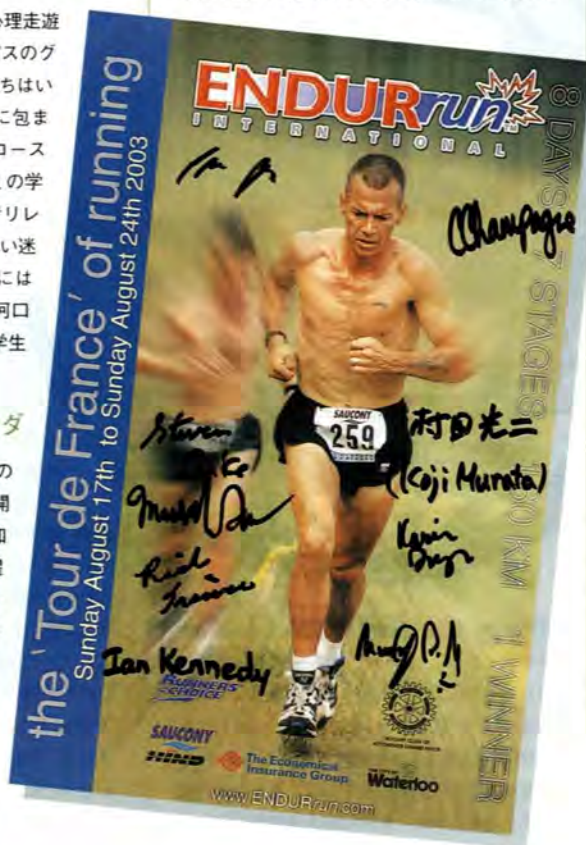
初日のハーフマラソンを1時間34分程度で走り、月曜は15キロのロードレースを1時間5分で上々の走り出しだった。しかし、火曜に

クロカンコースの30キロの途中で失速し、2時間50分かかってからは、厳しく長く、完走できるのだろうかと自問自答する闘いとなった。一方でぜい肉と邪心がそぎ落とされていくような感覚を、他方で筋肉繊維が切れ、活力が枯渇していく感覚を味わっていた。それでも木曜の休みで一息つき、毎日違ったコースをカナダの自然を満喫しながら走り続けた。最終日のフルマラソンは女子のトップにも抜かれてしまったけれど、3時間43分と久しぶりに4時間を切った。総合5位、トータル13時間45分27秒、完走しただけで幸せだった。

9人の強者たちも、その倍以上のボランティアの方々も、皆笑顔だった。ボランティアの人たちには言葉に尽くせないくらいお世話になった。ボランティアの一人に、レースディレクターのシュミットさんの息子のスベンサー君(小学校低学年)がいた。レース後の青空の下で、「いつか君も走ってみるか」と聞いたら、「そうしたい」という答えが返ってきた。「じゃ、いつかおじさんと競争しよう」とはうまく言えず、私は笑顔を返すだけだったが、競争する間もなくすぐに追い越される予感がした。

走る日々

私の出身大学では、伊豆の山中で標高差千メートル近くに及ぶフルマラソン大会が行われている。大学1年から走り、最近では4年前(46歳の時)に参加した。以前いた大学には、敷地の周囲を11キロ程度走る「武蔵野マラソン」があった。一橋大学にはそういった大会はないし、走る文化も見あたらない。奇異な目で見られながらも、東キャンパスのコースや矢川北団地までのコースを週に2~3回、1回に5~10キロ私は走る。どこかにゴールがあるわけではない。



新自由主義政策による民主主義の破壊、その深刻さを鋭く説く

本書はかつてのエリツィン大統領の市場経済アドバイザーを務め、現在ケンブリッジ大学に設けられた国際ビジネス経営センター副所長を務めるNoreena Hertzの著作、*The Silent Takeover: Global Capitalism and the Death of Democracy*, Arrow, 2001の全訳である。本書の分析対象は、1980年代以降急速に進む資本主義のグローバル化であり、本書は、このグローバル資本主義を「選挙を経ない権力者—大企業—が政府の役割を肩代わりしている世界」(20頁)と捉え、こうした「市民社会」、「政府」から「巨大企業」への機能・権力シフトと、そのことが意味するところを批判的に問い質し、民主主義の観点から現グローバリゼーションの再考を迫ったものである。



『巨大企業が民主主義を滅ぼす』
ケンブリッジ大学教授 ノリーナ・ハーツ／著 鈴木淑美／訳
早川書房刊 定価：本体2,000円＋税 2003年8月20日発行

資本主義の グローバル化の下で進行する 企業による政府の「無言の乗っ取り」

今日の資本主義のグローバル化は、新自由主義政策の世界的展開を条件とし、規制緩和、民営化、法人税の引き下げ、福祉の削減を内容とする、この新自由主義政策は、オイル・ショック以降レーガノミクス、サッチャー主義として全世界に広がる(第2章)。新自由主義政策によって支えられた資本主義のグローバル化、この「レッセフェール資本主義は、既に勝利したように見える」(50頁)。しかし一見繁栄化の一方で、絶対的貧困の拡大がみられ、また南北、東西間のみならず、西側先進国内部においても経済的格差が拡大、その結果として、治安、人々の健康状態の悪化が進む(第3章)。にもかかわらず、政府は問題を直視することなく、経済的繁栄ばかりを追う。今や、各国政府、そしてWTOに代表される国際機関は、人権、民主主義、生命、途上国の権利を犠牲にしてまで企業のマーケティング戦略の先導役を務める(第4章)。こうした政府の機能変化が何故生じるのか、機能変化の根底にあるのが政治献金である。政治献金によって企業は政府の政策決定権を掌中に納める(第5章)。この現象は、政府と大企業間の力関係の逆転を意味し、今や、政府に代わり消費者運動が企業に対するチェック役を果たす。実際、消費者運動は、環境問題、下請工場での労働条件の改善等、これまで大きな効果を発揮してきた(第6章)。しかし、その一方で消費者運動は問題の根本的

解決には至らず、限界を持つ。規制に合法性が伴わず、何よりも運動を方向付ける情報源、メディア自体が大企業の支配下に置かれているからである(第7章)。

そうした大企業は、政府の経済政策を牛耳るに留まらず、加えて政府に代わり、教育、福祉、

与えられたものではない。なによりも倫理とビジネスはいつも一致するわけではない。

すべての人々の幸せを可能とする グローバリゼーションは ありえるのか?

市民社会は、企業から政府を取り戻す必要がある(第10章)。では、いかにして企業の支配から政府を市民社会のサイドに取り戻し、民主主義を回復させることができるのだろうか。大企業、政治家による国民利益の軽視に対するNGO等の抗議運動が触媒役となり、その運動が政治改革につながることによって初めて市民社会は民主主義を取り戻すことができる。この政治改革の下で、政治献金を禁止し、また大企業優遇政策を廃止することにより政府の財政機能をとり戻し、そして社会正義の観点から企業に対する社会的規制を国内、およびグローバルレベルで実施する体制を整えることができ初めて、すべての人々のためになる「グローバリゼーション」が実現しよう(第8章)。

私たちを取り巻くグローバリゼーションとは一体何か。巨大な富が産み出される一方で、貧困が増大し、また経済格差が拡大し、社会の分断化が広がるのは何故か。すべての人々の幸せを可能とするグローバリゼーションはそもそもありえないのか。こうした問題を最終的に解く鍵を筆者は「民主主義」の問題に求める。「無言の乗っ取り」が民主主義を破壊するものであり、その破壊がいかに重大、深刻なものであるかを本書は見事に説いているといえる。



公共事業、保健・医療分野に参入し、「倫理マーケティング」(214頁)を展開する。ここに至り、企業による政府の「無言の乗っ取り」(230頁)が完成する(第8章)。だが、この「無言の乗っ取り」を容認することはできない。企業が政府を代替するとすれば、誰が企業を監視するのか。また、企業の権力は選挙によって

40余年の一橋人生をふりかえる

学長インタビュー

この11月、2期6年の任期を終え、石弘光学長が退任されます。
国立大学の法人化へ向かう激動の時期に、一橋大学のために先頭にたって尽力された石学長に、
これからの一橋大学への期待と、一橋人生を語っていただきました。

一橋大学のために、
やるべきことはすべてやりました。
48年の一橋人生を振り返ると、

「Very Happy」

の一言です。

● 一橋大学長 石 弘光

キャンパスは大学の顔である

「これでキャンパスを少しでもキレイにできる」。学長に就任するにあたって、私が一番嬉しく思ったことがこれでした。そんな些細なことをと、意外に思われるかもしれませんが、しかし、武蔵野の自然に恵まれた素晴らしいキャンパスをもちながら、当時の一橋大学はその優れた資産を活かしてはいなかった。あちらこちらにゴミが散在し、教室のブラインドは壊れたまま、隅には埃が溜まり、壁にはペンキの落書きがある。こうした状況を私は恥ずかしいと思っていたし、環境整備は大学全体のテーマとして総力をあげて取り組むべき課題だと考えていたからです。

キャンパスは大学の顔です。世界の優れた大学はどこも、そうした意識をもち、教師も学生もキャンパスを大切にしています。本学に、そうした意識が欠けがちなことを私は予てから残念に思っていました。教室や研究室、校庭を含めて、整備された美しい環境のもとでしっかり勉強をする、というのが学問をする上での必要条件。学生の勉強意欲を削ぐような環境は、大学としては是正していかなければなりません。そういう意識をどう醸成し、共有していくかには、かなり苦慮しましたね。幸い、国の予算も獲得でき、教職員や学生、OB・OGも含めて、環境への意識はかなり高まってきたと思います。ただし、失敗だったのは、「クリーン・デー（学内清掃の日）」作戦。参加する



のは年配の事務の方ばかりで、肝心の学生は出てこない（笑）。こればかりは、短命に終わった試みでした。

自然環境もキャンパス環境も、関わる人が気を緩め、こんなことぐらいと自分に甘えを許してしまったら、すぐに後退してしまいます。これからもキャンパスを愛し、キレイにしようという気持ちは、一橋の関係者全員がぜひもちつづけてほしいと願っています。

世界最高の研究・教育機関をめざして

私が学長になった6年前、国は国立大学の法人化の方針を打ち出しました。法人化にどう対応するかは、国立大学全体の問題であり、一橋大学自身の問題でもあったのです。私は法人化



石ゼミのポリシーは、「Be Punctual」。遅刻厳禁・喫煙禁止のゼミとして有名だった。
「時間にルーズなヤツは人間もルーズだというのが、恩師の教えであり、はくの持論。学生にはずっと言い続けてきました」

すべしと考えていましたから、この6年間にさまざまな構造改革を推進してきました。この4月1日、一橋大学は法人としてスタートを切り、一つの区切りがついたという思いです。

特に2期目の3年間は、一橋大学にとって重要な時期でした。新しい時代に向けて、残すべきものは残し、改めるべきことはどしどし改めていこう。もっと外に目を向け一橋大学に不足している部分を補い、競争力を高めていきたいと考えていましたから、意識的に大胆な改革を進めたところもあります。四大学連合の締結、小平国際キャンパスの開設、マーキュリータワーの建設など、さまざまな領域でのOB・OGとの連携推進などは、その一例。問題がすべて解消したわけではありませんが、学長としてやるべきことはすべて手懸けたのではと考えています。

現時点で唯一、気がかりなのは北京事務所プロジェクトですが、これは長期的な視野にたって推進していくべきものです。一橋大学には「世界最高水準の研究機関になる」という大きなビジョンがありますが、何より重要なのはビジョンをビジョンで終わらせないこと。北京事務所はビジョンを現実のものにしていくための布石の一つですから、5年後、10年後の成功を次の学長に委ねたいと思っています。

もちろん「教育のさらなる充実」も、大切なテーマです。FDや授業評価といった教育改革の成果は、徐々に顕在化しつつありますが、さらに推進するためには教師と学生、両者の意識改革が重要だと思います。教師には、大学人として教育の重要性をこれまで以上に認識してほしいし、学生も休講を喜ぶような意識ではダメです。大学は学問するためにある、という原点をキチンと守り、教師も学生も切磋琢磨しながら、

日々の勉学を通じて研究・教育の場をいっそうよくしていくことが、優秀な人材を輩出する土壌となるのです。これができないと大学は、これからの大学間の競争に生き残れないでしょう。

一橋のゼミは最高の宝物

私は27歳で助手になり、2年後に専任講師となり初めてゼミをもちました。一期生はもう還暦を迎えようとしており、最後の28期生はまだ20代です。その教え子一人一人が、私の自分史の節目です。ゼミは私の宝です。家で学生の面影をみてきた家内にとっても思い出の沢山つまった大切なものです。ゼミ生の仲人は57組やりましたし、息子たちもゼミテンの諸君には随分遊んでもらいました。いまでもゼミの同窓会をやると、学生は私のところへくる前に、「一宿一飯」の恩義か、まず家内のところに挨拶にいくんです(笑)。

一橋大学のゼミにおける教師と学生の距離の近さは、世界でも希有な存在です。それが競争力の源泉のひとつでもあると思っています。教員の流動化が進むこれからの時代、ゼミがどこまで持続できるのかは未知数ですが、私にとってゼミは、学生としても教師としても最高の思い出です。

一学生として学部に入学生した日から今日まで、私は48年間、

一橋大学で過ごしてきました。嬉しいことも、苦しいことも多々ありましたが、一言で振り返れば、「Very Happy」。一橋大学とともに歩んだ毎日の生活は餘り豊かでしたし、私の人生そのものも豊かにしてもらった。感謝で一杯という気持ちです。(談)



石 弘光 (いし・ひろみつ) 一橋大学長 経済学博士

1937年 東京生まれ
1962年 一橋大学経済学部卒業
1963年 一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了
1965年 一橋大学経済学部助手
1967年 同 講師に就任
伝説の石ゼミがスタートする
(第一回ゼミテン数13名)
1970年 同 助教授に就任
1977年 同 教授に就任
1998年12月 一橋大学長に就任。現在に至る

この間、米国ミシガン大学、カールトン大学、
豪州ニュー・サウス・ウェールズ大学、
英国オックスフォード大学、
伊 ポッコニー大学、などの客員教授を歴任

●
一橋大学総在籍年数：48年
教職在籍年数：40年
ゼミテン総数：278名(全28回)
同窓会組織：三石会
(石の上にも三年の口癖から命名)



最後のゼミテンが卒業した2000年6月に出版された、石ゼミ出身者による文集「山なみはるかに」(一石ゼミ三十年のあゆみ)。

Campus Information

一橋大学社会科学古典資料センター主催国際シンポジウム

シンポジウム カール・メンガーと自由主義の歴史的諸相
タイトル Carl Menger and the Historical Aspects of Liberalism

- プログラム ●セッション1 「オーストリア学派の基礎 (Foundation of Austrian School)」
Karl Milford (Universität Wien)、堀 茂樹 (京都産業大学)
- セッション2 「経済学と知識 (Economics and Knowledge)」
Richard Arena (Université de Nice)、江原 達 (小樽商科大学)
- 特別講演 「メンガー手記本に見られる書き込みについて」 池田幸弘 (慶応義塾大学)
- セッション3 「戦間期のオーストリア学派 (Austrian School in the Inter-war Period)」
Harald Hagemann (Universität Hohenheim)、中山智香子 (東京外国語大学)
- セッション4 「ヴェーバーとオーストリア学派 (Weber and Austrian School)」
Keith Tribe (University of Sussex)、橋本 努 (北海道大学)
- ラウンドテーブル 「メンガーと現代自由主義 (Menger and Modern Liberalism)」
討論: Kurt Leube (Hoover Institution)、八木紀一郎 (京都大学)、尾近裕幸 (国学院大学)
司会: 西澤 保 (一橋大学)、中山智香子 (東京外国語大学)
- 使用言語: 英語 (通訳なし)

日時 2004年12月18日 (土) 9:00~17:00 12月19日 (日) 9:00~17:00
会場 一橋大学長野書院
〒186-0004 東京都国立市中2-17-35 JR中央線国立駅南口下車、徒歩約12分
なおシンポジウムにあわせ、12月17日 (金) 13:00~16:30に社会科学古典資料センターにて、カール・メンガー文庫特別展示を行います。

お問合せ 一橋大学社会科学古典資料センター
電話: 042-580-8248 FAX: 042-580-8250 E-mail: Menger@ad.hit-u.ac.jp



世界的経済学者2名に対する 名誉博士号授与式及び記念講演が行われました

名誉博士号授与者
ケネス・アロー教授 (スタンフォード大学・ノーベル経済学賞受賞)
アマルティア・セン教授 (ノースウェスタン大学・ノーベル経済学賞受賞)

- <記念講演>
●講演者: アマルティア・セン教授
●テーマ: Global Democracy
●日時: 2004年7月20日 16:00~17:00
●場所: 一橋大学国立東キャンパス 東2号館2201番教室
<記念祝賀パーティ>
●日時: 2004年7月20日 17:30~19:30
●場所: 一橋大学国立東キャンパス マーキュリーホール



一橋大学名誉博士称号授与規則

- 【趣旨】
第1条: 一橋大学 (以下「本学」という。) における名誉博士の称号授与については、この規則の定めるところによる。
- 【資格】
第2条: 名誉博士の称号は、学術研究もしくは国際交流の発展に極めて顕著な業績をあげた者又は人類文化の発展に顕著な貢献をしたもので、本学において特に顕著なことが選出と認められる者に対して授与することができる。
- 【推薦】
第3条: 前条に該当すると認められる者がある場合、学長、各研究科長又は経済研究科長はこれを推薦することができる。
- 第4条: 名誉博士の選出は、部局長会議の審議を経て、教育研究評議会が行う。
- 【名誉博士記の交付】
第5条: 称号を授与するときは、別紙様式による名誉博士記を交付する。
- 【附則】
この規則は、平成16年4月1日から施行する。

編集後記

四月から編集委員になった新米です。さっそく本号の編集責任者として編集後記を書く役目が回ってきました。人懐きの寛いところですね。

さて、本号の特集はゼミと図書館です。どちらも本学が誇る伝統的制度・施設であり、私も30年以上前に入学して以来さまざまな恩恵を受けてきたので、校正刷を読みながら感慨にふけっているところです。取材にご協力いただいた皆さん、どうもありがとうございました。

一方で、情報技術の発展や学生気質の変化などにより、これらのあり方の見直しを求める声もあります。もちろん、伝統はただ守るだけではなく、日々の革新の努力によって新たな意義を与えられ、ますます精進を放っていくのでしょうか。本号の内容を読みますと、その可能性は十分に広がっているように思われます。

HQの読者の皆さんは、現役の学生・院生、OB・OGから、将来の学生・院生まで多様ですが、それぞれの立場からさまざまな感想を持たれたことでしょう。ご意見をいただき交流できたらなどとも考えていますので、どうぞよろしくお願いします。

広報誌編集委員 池 幸

一橋大学広報誌「HQ」

【編集発行】
一橋大学広報委員会
【委員長】
商学研究科長 伊藤 健
【編集委員】
商学研究科助教授 山下 智子
経済学研究科助教授 池 幸
法学研究科助教授 山田 寛
社会学研究科助教授 足利 昌子
言語社会研究科助教授 坂井 洋史
国際企業戦略研究科助教授 大上 慎吾
経済研究所教授 安田 隆

【印刷・製本】
株式会社情報研究社
【お問い合わせ先】
一橋大学学長室企画広報係
〒186-8601 東京都国立市中2-1
Tel: 042-580-8032
Fax: 042-580-8016
http://www.hit-u.ac.jp/
koho@ad.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。
一橋大学学長室企画広報係
koho@ad.hit-u.ac.jp
※本誌掲載の文章・記事・写真等の
無断転載はお断りします。